リアリズムの夜明けから ロストジェネレーション、そして 戦後へ

O・ヘンリー

F・スコット・フィッツジェラルド

アーネスト・ヘミングウェイ

『トム・ソーヤーの冒険』の魅力

和田　綾輔

① Charms of *The Adventures of Tom Sawyer*　②英語名：Ryosuke Wada
③所属：欧米言語文化講座　英語圏　④　　⑤
⑥　　⑦論文を書くにあたっての関心事：作者は何を考え、何を伝えたくてこの作品を書いたのか

I. はじめに

『トム・ソーヤーの冒険』（*The Adventures of Tom Sawyer*）は１８７６年にマーク・トウェイン（Mark Twain、１８３５－１９１０）によって発表された有名な物語である。現在に至るまでに映画化され、日本ではアニメ化までされるほどの人気を誇る。時代を越えて愛され続けるこの作品の魅力は何か？また、筆者はこの作品を通して読者に何を伝えたかったのか？マーク・トウェインの人生、生き方なども絡めながら考察していきたいと思う。

II. 作者の生い立ち

マーク・トウェインは１８３５年にミズーリ州フロリダで６人兄弟の５番目としてうまれた。本名はサミュエル・ラングホーン・クレメンズ（Samuel Langhorne　Clemens ）。彼が４歳の時、一家はハンニバルという町に移ったがそこは当時舟運で栄え、後にその町とそこの住人が彼の作品『トム・ソーヤーの冒険』に現れる人物と場所のモデルとなった。１８４７年に父が多くの負債

を残して死去した後は町の新聞社に勤め、そこで文章を書く術を身につけた。南北戦争が勃発すると国軍の小尉として従軍するもすぐに除隊した後はカリフォルニアに移り新聞社に勤めた。東部出身の裕福な家庭で育った女性と結婚し、これ以降は東部に移り住み作家としての後半生に入る。　彼の３大傑作と呼ばれる『トム・ソーヤーの冒険』『河上の生活』『ハックルベリー・フィンの冒険』など主要作品のほとんどがこの時期に生み出され、多くの人々に読み継がれることとなった。このように波乱万丈な人生を歩んだ彼だが、ユーモアには非常に富んでおり、その文体はヘミングウェイなどの有名な作家に引き継がれている。

Ⅲ. あらすじ

主人公トム・ソーヤーはおよそ１０歳のわんぱく少年である。母は亡くなり、優等生の弟シドと共に、伯母のポリーに引き取られて暮らしていた。トムは勉強が嫌いでいたずらに情熱を傾け、家の手伝いをさぼることに知恵を働かせた。いつも親友のハックと一緒に遊んだりいたずらしたり、日曜学校でも校長先生の訓話をぶち壊そうと企んだり、気障りな少年と取っ組みあいになったり、家出して川をいかだで下り海賊ごっこをしたりと、まさに「いたずら小僧」と言うにふさわしい少年であった。しかしそんなトムではあったが驚くべき行動力の持ち主であり、新しい遊びを流行らせたり子供たちの心をつかむような行動をすることにかけては天才であり、周りの子供からは一目置かれる人気者であった。ある日トムはハックと共に真夜中の墓地で殺人を目撃してしまう。犯人のインジャン・ジョーは他人に罪を着せるが裁判でトムに真実を告げられ逃走する。夏休みに観光用洞窟でトムは迷子になり、途中に行方不明になっていたインジャン・ジョーと遭遇してしまうが、なんとか逃れ町に戻る。しかしインジャン・ジョーが洞窟で何をしていたか気になったトムは再び洞窟に戻り、そこで財宝を探し当てる。

Ⅳ. 内容の分析

この作品のテーマはやんちゃ少年トム・ソーヤーの人並みはずれた「冒険心」と「自由」である。この作品が発表される当時のアメリカ社会を考えてみるとこの時代は開拓時代であり人々の好奇心や冒険心をそそっていた、さらに１８６３年にはリンカーンによって「人民の、人民による、人民のための政治」という民主主義の基本理念が発せられ、「自由の国」アメリカという理念の旗がかかげられた時代である。どうやら、この作品のテーマである「自由」と「冒険」は作品が作られた時代のアメリカ社会や人々の様子を反映していると言えるのではないだろうか。さらに作者の生い立ちを見ると、トム・ソーヤーの境遇と

大きく重なっているということが容易にわかるだろう。実際に筆者は物語序文でこの作品は自身の少年期の記憶を再構成したものであると書いている。筆者はトム・ソーヤーに少年時代の自分の姿を投影し、彼自身がトムになりきって冒険を楽しんだように、全ての読者に楽しみながら読んで欲しいという思いがこめられているのだろう。

V. トム・ソーヤーの魅力

なぜやんちゃ少年トム・ソーヤーが読者の心を捉え続けるのだろうか。その秘密はやはりトムの並外れた冒険心と自由にあるのではないだろうか。その毎日の「冒険」の楽しさを読むと、どことなく懐かしく感じ、自分もこんなところでこんな冒険をしたかったという思いにとらわれてしまう読者は私も含め、大勢いるはずである。いつもいたずらすることを欠かさないやんちゃなトムは、少年なら一度は憧れを持つ「不良」少年であり、アメリカ文学における「不良」像の起源であると思われる。テレビゲームなどが遊びの中心となっている現代だが、このやんちゃな少年は我々現代人が忘れてしまった本当の「遊び」を知っている。これもまたトムの魅力の一つである。実際に私達が子供の時も外を走り回ったり、冒険をしたりという事はあまりしなかっただろう。私自身もトムの冒険、やんちゃぶりには憧れを感じた。現代人が忘れてしまったものをトムは持っていて、そんな彼自身に我々読者は憧れを抱くのではないだろうか。

⑧学んだこと

マーク・トウェインは序文でこの小説の主たる対象が少年少女であると書いている。しかしそれに続く文章の中で、大人に対しても童心に帰って楽しむことを呼びかけている。彼自身この作品を通じて子供心に帰り、トム・ソーヤーに自分を重ね合わせて冒険を楽しんでいる様子もうかがえることから、彼の本来の目的そして読者に伝えたかったことはそこにあったのではないだろうか。私自身の生活でも、もう大人なのだから子供みたいにいつまでも遊んでいられないと思うときもある。が、しかしこの作品を読んでユーモアにあふれいつまでも子供の時の遊び心と冒険心を忘れずに人生を楽しむ、という彼の生き方は見習うべき価値があると私は感じた。

⑨Summary

Mark Twain is a very humorous novelist. He had always tried to enjoy his life as if he were a child. Many people were interested in his masterpiece, *The Adventures of Tom Sawyer* and his life. I think it is worthy following his way of life.

参考文献

『トム・ソーヤーの冒険』　マーク・トウェイン著　大久保　康雄訳
（新潮社　１９５３）

参考ＨＰ

http://www001.upp.so-net.ne.jp/meisaku/meisaku/tom/tom.html
http://www.marktwainhouse.org/japanese/

O・ヘンリーの「最後の一葉」から学んだこと

爲家　弥生

① 英語タイトル：Lesson of "The Last Leaf"
② 英語名：Yayoi Tameka
③ 所属：欧米言語文化講座 英語圏
④
⑤
⑥
⑦ 論文を書くにあたっての関心事：将来(人生)について・社会に出る不安・短篇小説が持つメッセージ性

Ⅰ．興味を持った理由

米文学に関する知識が皆無に近かった高校生の私が唯一「アメリカの作家」として名前を認識していたのがO・ヘンリーで、その作品をいくつか読んだことがあった。その頃、「小説＝長くて読むのに時間がかかるもの」と何となく考えていた私は、彼の作品に触れて初めて短篇小説の存在を知った。彼の作品は結末に意外性を持たせたものが多いのだが、いくつか作品を読むにつれて、短いページ数の中の話の展開にはそれぞれ深い意味があるのだろうと感じるようになった。当時はそれ以上深く考えず、ただ読んでいただけだったのだが、今回与えられたテーマに沿って論文を書くにあたって、この機会に作品を私なりに読み解いてみようと思った。これが、O・ヘンリーの作品を取り上げようと思った理由である。

今回読むことにした「最後の一葉」("The Last Leaf")も、以前読んだことのあった作品の中の一つであった。一度読んだあとの感想は、「ちょっと感動できる話」くらいだったが、もう一度読み返してみると、考えさせられることが多いのではないかと思うようになった。大学三回生の今、頭の中にある考え事でもっとも多いのは、卒業後の就職のことを含めた、これからの自分の生き方についてである。そこで、「実学」としてこの文学作品をとらえるために、原文では8ページ強、日本語訳文でも12ページという短い話ではあるが、そこから、これからの生き方にヒントを得られるような何かを学び取りたいと思っている。

Ⅱ. O. Henry と「最後の一葉」

ⅰ. 作者と作品について

「最後の一葉」の作者である O・ヘンリーは、本名をウィリアム・シドニー・ポーター(William Sydney Porter, 1862-1910)という。彼の人生は、妻を早くに亡くしたり、勤めていた銀行の金を流用して投獄される経験を持っていたりと、あまり平穏ではないものだった。彼の創作について、大津の解説を引用すると、「十三冊の短篇集、二百七十二の作品を残した。人気の絶頂を迎えたのは、死後全集が刊行されてからであった」(258)ということである。

(O. Henry's American Scenes, 1978)

「最後の一葉」の舞台は、絵描きが多く住む、ニューヨークのある地区とされている。あたりで猛威を振るうようになっていた肺炎がその町にもやってきてしまったことによって、若い女性画家ジョンシー(Johnsy)もそれにかかってしまった。病気で生きる希望をなくし、窓から見える蔦の葉が全部落ちたら自分も死ぬと悲観的になっている彼女のために、いつか傑作を書きたいと思い続けていた彼女の階下に住む画家ベールマン老人(Old Behrman)が心をこめて、冷たい嵐の夜に一枚の葉を描き、完成した後肺炎にかかって自分は亡くなるが、彼女は助かる、という話である。この二人以外にも、ジョンシーの同居人スー(Sue)とジョンシーとベールマン老人を診察する医者が出てくるが、以下では、ジョンシーとベールマン老人の二人の言動に注目する。

ⅱ. 希望を捨てず、前向きに生きることと、人を励ますこと

ジョンシーは、肺炎にかかって寝込んだことによって、弱気な気持ちが強くなっていた。部屋のベッドから見える蔦の葉が落ちていく様子を眺め、一枚一枚数を数え、その葉が全て落ちると自分も死ぬのだ、と悲観的になっていた。その彼女に看病をするスー

に対し、医者は、「助かる見込みは――そうだな――まあ、十に一つといったところだな(中略)その見込みも、あの娘が生きたいと思う気持ちにかかっている」(232)と言っていた。日本語でいう、“病は気から”が悪い意味で当てはまっている、という状況だった。

このような状況から抜け出し、病気が快方に向かっていったのはなぜだろうか。これは、この小説の一番重要な展開である、ベールマン老人の「傑作」によってであると言える。生きる希望を失っていた彼女だったが、最後の一枚になった葉を眺め、じきに落ちると言っていたにもかかわらずそれがなかなか落ちなかったのを見て、「あの最後の一枚がなにかの力でいまでもあそこに残っているのは、私がどんなに罪深かったかを私に教えるためだったのね。死にたいと願うなんて罪悪ね」(239)と言うようになった。そしてその後、また絵を描きたいとまで思うほど生きることに対しての希望を取り戻したのである。おそらく、ベールマン老人が葉を描いておらず、ジョンシーが全ての葉が落ちてしまった様子を目の当たりにしていたなら、このような前向きな気持ちになることは難しかっただろう。“一枚の葉”というきっかけによって、ジョンシーは気持ちを持ち直すことができたのである。

実際に病気になったとき、気持ちを前向きに保つことでこの小説のように病気が治るか、これは決して確実に言えることではない。しかし、病気のときに限らず、何か失敗をして落ち込んでいたり、悩みや不安を抱えていたりするとき、少しでも前向きな気持ちを持つように心がけることによって、落ち込んだ気持ちや悩みなどが和らぐことが多いのではないだろうか。また、この小説では、ジョンシーの気持ちの持ち方が回復に影響したことは指摘できるが、そのきっかけとして“一枚の葉”の存在があったことは確かだろう。実生活に置き換えて考えてみると、この葉のような働きができるもの、すなわち、人に前向きな考えを持たせるようにできるものの一つには、周りの人の「言葉」があるのではないだろうか。ある人が何かの理由で落ち込んだり悩んだりしているとき、自分の気持ちを自分で持ち直すことは難しくても、周りの誰かの「言葉」によって励まされ、前向きになれることがある。ジョンシーの気持ちの変化と、実際に身に起こった変化の描写から、辛いことがあっても、気持ちを前向きに持とうとすること、自分以外の人に対しても「言葉」やその他の方法によるきっかけを与えて気持ちを持ち直させることが出来るのではないか、と考えた。

iii. 自分のことは顧みず、人のために何かをすること

ジョンシーに生きる希望を与えた“一枚の葉”を書いたベールマン老人は、「芸術の落伍者」(236)といわれていた人物で、たびたび“傑作を描く”と言いながら、長い間着手もしないままだった。スーからジョンシーの様子を聞いたとき、ジョンシーの状況を哀れみ、「いつか傑作をわしが描いてやろう」(237)と言っていたが、恐らくスーはこの発言を本気とは思っていなかっただろう。しかし、この老人は、長い間書きそびれていた傑作を書き上げ、それが完成した後、命絶えたのである。

ベールマン老人は、なぜ“一枚の葉”を描いたのだろうか。これは、ジョンシーという一人の若い女性が死と隣り合わせになっている上に、本人が生きることに対して消極的になっているという事実を知って、大きく心を動かされたからだと言える。彼の心境の深い部分までは推測仕切れないが、おそらく、それまで傑作を描けていなかったのは、描こうと思えるようなきっかけをつかめていなかったからであろう。単に絵を描くだけなら、何となく気に入った風景や人物のモデルを描けばよいが、自分が心から満足できる、思いをこめて描ける“傑作”になる題材というのは、そう簡単に見つけられるものではないだろう。しかし、ベールマン老人は、偶然階上の女性(スー)から聞いたその友人(ジョンシー)の話によって心を動かされ、創作への意欲が掻き立てられたのだといえる。

ベールマン老人は、渾身の力を振り絞って“一枚の葉”を描いた。その作品は、ジョンシーが本物の葉と見間違えた程緻密で精巧なもの、まさに傑作と呼ぶにふさわしいものであった。この葉によってジョンシーの命は助かったが、老人自身は肺炎で亡くなった。彼はもちろんその結果に不満を持ってはおらず、むしろ、思い通りの作品が描けて満足だという気持ち、ジョンシーの命を救うきっかけを作ることが出来て嬉しいという気持ちを持っていると思われる。自身が傑作を描きたかったという気持ちはあっただろうが、ベールマン老人のしたことは、客観的な言い方をすると、「自分のことは顧みず、人のためになることをした」と言えるだろう。このことも、この小説の中だけに言えるのではなく、社会生活の中でも大切なことであると言える。もちろん、この老人のように命を懸けてまで人のために行動するのは容易に出来ることではないし、自分自身の命は大切にしなければならない。しかし、自分の利益や損得については考えずに、誰か他の人のために小さなことでも一途になって行動することは、人として備わっていることが望ましい姿勢ではないだろうか。そして、こういった「自分ではない誰か」への行動によって、自分自身の心も豊かさを感じられるのではないか、ということも、ベールマン老人の創作のエピソードから考えるようになった。

iv. 文学作品から学ぶこと

「最後の一葉」という短い小説の中に、作者がどのような主題をおいたのか、今の私には深層部分までは理解出来ていないだろう。しかし、一つの文学作品に対して、自分なりの教訓を見つけることや、その話から自分の考え方を再検討することというのも、文学作品の一つの読み方だと言えると考える。したがって、この考えのもと、上の節で述べた**この小説から学んだ二つのこと**について、改めて検討したい。

まず、「希望を捨てず、前向きに生きることと、人を励ますこと」についてである。この小説の登場人物であるジョンシーは、病気にかかったことにより弱気になり、生きる希望を失っていた。確かに、気持ちが後ろ向きになっているときは、その理由が深刻であればあるほど、自分で前向きな気持ちを持とうとすることは難しいだろう。しかし、立ち直った後に振り返ってみると、悩んでいた事がそれほど深刻ではなかった、という

ことに気づくことも珍しくないのではないだろうか。人間は、一つの心配事や悩みを抱えたとき、それに対して不安を感じることによって、悩んでいなかったときには気にしなかったような事まで気になってしまうことが多いと思われる。したがって、やはり、悩みや心配事のある中でも、あまり考え込まず、明るい気持ちを持つようにすることで、その解決につながる鍵をつかんでいられるのではないか、と考える。

しかしながら、望ましいことではありながら、自分自身の気持ちの持ち方で悩みや心配事を解決することは必ずしも出来ることではない。ジョンシーにベールマン老人の絵があったように、自分以外の何か、誰かの助けが必要なことも多いであろう。そして、上の節でも述べたように、その手助けの一つとして、「言葉」があると言える。人から悩みを打ち明けられたとき、それに対するアドバイスをすること、落ち込んでいる人に、励ましの声をかけることなど、「言葉」は多くの役割を担っている。これから社会に出て行けば、今までよりも多くの壁にぶつかり、自分自身が悩んだり、周りの人が落ち込んでいたりする場面に出会うことがあるだろう。自分自身のことで悩むことが多い現在、自分に目を向けることに精一杯で、周りの人に「言葉」をかけることにあまり目を向けられていなかったが、この小説のベールマン老人の生き様に触れて、人に「言葉」を与えられる側でもいられるよう努力したい、と考えるようになった。

「最後の一葉」から学んだもう一つのことは、「自分のことは顧みず、人のために何かをすること」である。この小説のベールマン老人のように、命を顧みず行動することは難しいことだが、こういった姿勢というのは、「相手のことを思いやる」ということにつながる部分があるのではないか、と考える。自分のことを最優先に考え、自分がよければ他のことはどうでもいい、という考えを持っていては、相手のことを思いやるなどとうていできない。しかし、人間は一人一人が好き勝手に生きていては社会は成り立たず、多くの人が集団の中で生活することによって成り立っている。その中において、相手を気遣う心を持ち、そのひとのために何かをしたいと考えたとき、それを実現するには、自分のことはひとまず考えないで行動しなければならないこともあるだろう。そして、相手のことを大切にするという考えを持って、実際に行動を起こしたとき、その人自身も満ち足りた思いを感じることが出来るのではないだろうか。自分自身のことで考えてみると、学生として大学に通う今に比べて、一人の社会人として働き始めると、今よりも更に、集団の中で生かされていることを認識するであろう。今でも、相手のことを気遣い、その人のためになることをするべきだ、ということを意識しているつもりではいるが、社会に出てからはその重要性をより意識するようになるだろう。こうした「一人の人間として備えておくべき人間性」についても、この小説を通して考えることができた。

Ⅲ. むすび

O・ヘンリーの「最後の一葉」から、単に読んで感動出来たという小説の一面だけでなく、これからの人生において教訓とできるような一面を垣間見ることができた。それは、「希望を捨てず、前向きに生きることと、人を励ますこと」と、「自分のことを顧みず、人のために何かをすること」である。ベールマン老人の行動によってジョンシーが助けられたという実際の小説からも、また、それをもとに自分の考えを巡らせていても、感じたのは、人間は一人では決して生きられないということだった。人間は誰しも弱い部分を持っているため、何かに悩んだり、落ち込んだりすることが当然ある。それをまずは自分で解決しようと試みるが、それが出来ないときは、周囲の人の助けが必要になる。それは、「言葉」という方法であったり、行動によって示される方法であったりと、時と場合によって異なるが、いずれにしても、手を差し伸べる側は「悩んでいる、落ち込んでいる人のために自分が出来ることをしたい」という、相手を思いやる気持ちを持っていることが大切である。私自身がこれから歩んでいく人生においては、自分自身で立ち直れないほど落ち込むことや、自分のことしか考えられなくなるようなことがあり、人に助けてもらわなければならないことがあるだろう。しかし、逆に、自分の周りの人がそういう状況に陥っていたら、自分が人にしてもらったことを思い出し、また、小説を読んで学んだことも思い返して、思いやりの心を持って接することが出来るようになりたいと思っている。

⑧　学んだこと、得たもの：O・ヘンリーの「最後の一葉」から、今後社会の中で生きていく上で大切になるだろう教訓を得られた。それは、希望を捨てずに前向きに生き、それを周りの人にも「言葉」などによって伝え、励ますことと、思いやりの心を持って、時には自分を顧みず、人のために行動すること、である。

⑨　SUMMARY : “The Last Leaf” written by O. Henry taught me some lesson which is important to live as a member of society in the future. One is to live thinking positively and to encourage other people. The other is to have consideration for others and to act for others without regard to your personal profit in certain circumstances.

参考文献・ホームページ

『オー・ヘンリー傑作選』、大津栄一郎訳、岩波書店(1979)
『対訳オー・ヘンリー』、小倉多加志訳注、南雲堂(1957)
<http://www.online-literature.com/authorpics/o_henry.jpg>
<http://www.yohan.co.jp/toeic/YL470.html>

オー・ヘンリーの人生と作品からメッセージを探る

乾　恵利

執筆者データ
①英語タイトル：　The Message from O.Henry's Life and His Work
②英語名：　Eri Inui
③所属：　欧米言語文化講座　独語圏
④
⑤
⑥
⑦論文を書くにあたっての関心事：　米文学史に残る人物の知られざる素顔・人生、
人々に勇気や感動を与えてきた作品、
作家が作品に込めたメッセージ

Ⅰ．はじめに

肺炎で生きる望みを失った若い女性ジョンジーは、寝たきりのベッドから見える蔦の葉が全部落ちるとき自分の命も尽きてしまうと信じ込んでいる。冷たい秋風に吹きつけられて蔦の葉はどんどん散っていくが、一枚だけ嵐にも耐え抜いた葉があった。その葉のおかげでジョンジーは生きる気力を取り戻し、病状も快方へと向かう。実はジョンジーを救った最後の一枚の葉というのは、ジョンジーの病状を聞いた、普段は酒浸りのだらしない生活を送っているぶっきらぼうな男ベーアマンが、最後の一枚の葉が散った嵐の夜に自分の命と引き換えにして書き上げた、最後にして最高の傑作であった。

（“ The Last Leaf ”本文要約）

貧しい夫妻デラとジムが、クリスマス・プレゼントにお互い何をあげようかと悩む。デラは、ジムが祖父と父から受け継いで大切にしている金の懐中時計を吊るすための鎖を買おうと考え、ジムは、褐色で輝くばかりに美しいデラの髪の毛をとかす鼈甲の櫛を買おうとする。しかし、そのようなものを買う余裕はこの夫婦にはなかったため、自分の一番大切なものを売ることでプレゼント代を工面する。結局、二人は金の懐中時計に相応しい立派な鎖と鼈甲の櫛を手にしたが、それらを使うべきデラの美しい髪の毛と金の懐中時計は既に売ってしまったのであった。（物語の結末では、「この一見愚かな行き違いをした二人こそが、本当の賢者である」とされている。）

（“ The Gift of the Magi ”本文要約）

この二作品を知っているだろうか？有名な作品なので、全文を読んでいなくても、大体の話の流れとしては知っているという人も多いだろう。そこで、この作品を知っているという人に対して一つ問いたい。この作品の作者は誰であるのか？・・・結論から言うと、これらの作者はオー・ヘンリー(O.Henry, 本名:William Sydney Porter 1862-1910)である。彼の作品としては、他に「都会の敗北」("The Defeat of the City")や「警官と賛美歌」("The Cop and the Anthem")、「よみがえった改心」("A Retrieved Reformation")、「赤い酋長の身代金」("The Ransom of Red Chief")などがある。短篇小説ということから誰でも気軽に手に取ることができ、それでいて深い印象を与えてくれる彼の作品に、私たちは心奪われたり、勇気付けられたりする。

彼はこのような有名な作品を残しただけではなく、非常に数奇な人生を送ったことでも他の多くの作家とは異なる。

興味を持った理由

オー・ヘンリーは500以上もの作品を残し、その中には映画化されたものや、前述した二編のような非常に有名な作品もある。また、英語の優れた短篇小説に与えられる賞として「オー・ヘンリー賞」が創設されている。彼に興味を持った最初の理由は、彼の作品のいくつかは知っていたけれども、全くといっていいほど彼自身についての知識を持っていなかったことにある。その後、同様にいくつか興味のある候補を出していき、それらについて軽く調べる作業を経て、最終的に彼を取り上げることにした決め手は、彼の驚くべき人生にあった。

II. オー・ヘンリーの生涯

ノースカロライナ州グリーンズボロで、医師アルジャーノン・シドニーの息子としてウィリアム・シドニー・ポーター(後のオー・ヘンリー)は生まれた。母親を3歳で亡くし、父の妹にあたる教育者の叔母によって育てられる。高等教育を受けずに、15歳で学校を卒業する。

20歳になると、知人の勧めによりテキサスに移り住む。そこで薬剤師、ジャーナリスト、銀行員の

出納係などの様々な職を転々として数年を過ごす。1884年に同じテキサスのオースティンに移り、1887 年にアトール・エステスと結婚する。この頃、彼はジャーナリストになるため、仕事からの帰宅後と休日を勉強時間に充てていた。それから数年後、倒産した新聞工場を借金して買い取り、1894年からは銀行員として働く一方、*The Rolling Stones*という風刺週刊誌を刊行する。しかし、売れ行きが不振であったために、翌年には廃刊となってしまう。そして『ヒューストン・ポスト』にコラムニスト兼記者として参加するようになる。

1896年、以前働いていたオハイオ銀行の公金を横領した疑いで起訴される。この銀行ではもともと経理処理がきちんと行われていなかったため、銀行側も周囲も彼に対して好意的であったにもかかわらず、裁判所に出頭する途中の列車の乗り換え時に逃亡を図る。それからしばらく逃亡生活を送っていたが、1897年に妻の危篤を聞きつけて戻ってくる。保釈金を納めて数ヶ月間は妻の看病に徹したが、同年の7月に先立たれる。そして1898年2月に懲役5年の有罪判決を受ける。刑務所では、監房に入らずに刑務所病院で薬剤師として働き、模範囚として減刑され1901年の7月には釈放となる。

釈放後、娘と義父母と共にピッツバーグで、『ピッツバーグ・ディスパッチ』紙のフリーランスの記者として働きながら作家活動をする生活を送り始める。しかし、9ヵ月後にはニューヨークの雑誌社の誘いを受け、娘を義父母に預けて単身でニューヨークに移り住む。そうして彼の前科のことを知る人がいないこの地で、作家活動を展開していく。

1907年には、一枚の手紙が縁で、幼馴染のサラ・リンゼイ・コールマンと再婚する。そして新居を構えて、ピッツバーグにいた娘のマーガレットを呼び寄せて三人で新しい生活を送り始める。

1910年6月、主に過度の飲酒を原因とする肝硬変により、病院で48年の生涯を閉じる。

波乱万丈の人生を送ったオー・ヘンリーだが、その核となるのが彼の物書きに対する憧れと情熱であった。罪を犯して刑務所行きになってしまった点においては非難を免れないだろうが、一貫して夢に向かって前向きに取り組む姿勢は、いつの時代においても私たちが見習わなければならないものではないだろうか。死因から推測するに、スランプでアルコールに頼って自虐的になったことも多かったことだろう。それでも最後まで、一般的な小説家には考えられないペースで作品を書き続けていたということから、彼の小説家としての意識の高さをうかがい知ることができた。

Ⅲ. オー・ヘンリーの転換期

オー・ヘンリーが短篇小説家として名を知られるようになるにあたって、最も重要となる時期は、刑務所で過ごした3年3ヶ月であろう。小説家は芸能人とは違って、本名でデビューすることが多い。しかし、彼の場合には本名の「ウィリアム・シドニー・ポーター」ではない「オー・ヘンリー」という名前が絶対的に必要であった。というのも、彼は刑務所内から新聞社や雑誌社に投稿し続けていたからである。本来ならばこのようなことは禁止されているのだが、刑務所内部の人が彼に同情して協力してくれたのであった。これまで家計を支えるために仕事の一環としてしか実現していなかった「作家になりたい」という夢が、皮肉な言い方をすれば、刑務所に入ってお金の心配をせずに

作家修行をする時間が存分にできたために、一歩一歩近づいていったのである。おかげで、入所したときは作家としてアマチュアだったけれど、出所したときはプロの作家になっていたといわれている。ここで考えたいのは、果たして自分なら刑務所に入ったときに彼ほど充実した時間を過ごせるのかということである。きっと多くの人が自分自身に絶望して、自分の夢を実現することについて考える余裕などないだろう。刑務所という場所においても彼が作家修行を続けることができたのは、彼自身の並大抵ならぬ意志・熱意によるものに違いない。人間は、なにかと理由をつけて楽な方へと逃れようとする生き物である。それを、どれだけ自分の意志で止めることができるのか…夢に向かって、いかなる境遇にあろうとも逃げ出すことのなかったオー・ヘンリーが、その良い例となってくれた。

入獄中にできた作品の中で、日本語で読めるものは以下の作品である。

・「あやつり人形」　河出文庫
・「口笛ディックのクリスマス・プレゼント」　河出文庫
・「ブラックジャックの売渡人」　新潮文庫
・「ハーグレイヴスの二役」　角川文庫, 岩波文庫, 新潮文庫

Ⅳ. オー・ヘンリーの作品に対する評価

まずはオー・ヘンリーについて書かれた二つの文章を紹介したい。

「彼はニューヨーク独特の真髄と芳香を探し求めた。その結果、この都会について彼が書いた物語の中には、その神秘を感じ、それを探り出そうとする意思によって品位を増したものもあった。」

「彼にはその場限りの考えしかなく、読者を即興的に楽しませる技法しかもたない根っからのエンターテイナーとなった。その効果を上げるためならば、彼はすべてのことを、たとえ真実さえも犠牲にするのを厭わなかった。」

一つ目の文章は、1952 年にヴァン・ウィック・ブルックスが雑誌『コンフィデント・イアーズ』に発表した「ニューヨーク　オー・ヘンリー」というエッセイに書かれたものである。そして二つ目の文章は、1923 年に F・L・パッティによって書かれた『アメリカ短編小説の発展』に書かれたものである。作家の真の評価は死後に下されると言われるが、そもそも世間は、生前の行いとして悪いことよりも良いことを評価することで美化しようとするきらいがある。しかしながら、オー・ヘンリーは先に述べたような有名な作品の作者であるのだから、その点を大いに評価されるのかと思えば、彼の作品に対する評価は時代や人によって良かったり悪かったりと一貫していない。その理由としては、彼の膨大な作品数に対して芸術的価値のあるものが少ないとされる点にある。その数少ない傑作と呼ばれるものに重点を置くのか、彼の全作品数に対する傑作数の割合に重点を置くかによって、彼の作品に対する評価が違ってくる。また、オー・ヘンリーが「ブラックマスク派」でも「ニューヨーカー派」でもないという、文学史におけるポジションの微妙さが文学的評価にまで影響しているとも考え

られる。

それでも、やはり彼の作品を愛読する人は多い。私もそのうちの一人であるが、彼の作品には芸術的価値や文学的なポジションでははかれないような何かがある。その何かこそが、彼の作品の愛読者を未来へと繋げていくものであり、最も重要な隠し味となっているのだと思う。おそらく、彼が作品に込めた並々ならぬ愛情が私たちにも何らかの形で感じ取れているのではないだろうか。本のようなモノを通してでも、魂や努力といったものを伝えられるということを学んだ。きっと、今後も多くの人たちが、彼の作品に魅了されていくことだろう。

私にとってオー・ヘンリーの「文学界におけるポジションの微妙さ」というのは、彼の魅力を追求する上で有利に働いたと思われる。一般的に彼の作品を評価する際には不利になっているとはいえ、言葉を変えれば「彼の作品は型にとらわれない」ということになるのではないだろうか。有名な作家だけの特権であるとはいえ、一般的な意見として小説家の総合評価が下され、その評価を作品を読んだこともないような人が鵜呑みにしてしまうのは非常に恐ろしいことである。

⑧学んだこと

オー・ヘンリーは、短い生涯の中にも多くの経験をしてきた。彼がどのような職に就こうと、どのような場所にいようと、彼の「物書き」に対する憧れや熱意といったものは終始変わることがなかった。

どのような境遇に立たされようとも、それを乗り越えられるほどの熱意や努力をすることの大切さを知った。

⑨英語サマリー

O. Henry had many experiences in his short life. Regardless of his job and circumstances, his longing and passion to be a writer did never change from beginning to end.

I understood that we should be eager and make every effort to get over hardship even if we are under bad circumstances.

参考文献・HP

『アメリカ文学史　A Brief History of American Literature』　西田　実　成美堂　1984 年出版

『「最後の一葉」はこうして生まれた』　斉藤　昇　角川学芸ブックス　2005 年出版

年譜　http://www13.ocn.ne.jp/~m-room/henry-note.html

オー・ヘンリー1　http://homepage1.nifty.com/y_nakahara/nw14.htm

オー・ヘンリー2　http://homepage1.nifty.com/y_nakahara/nw15.htm

「賢者の贈り物」　結城　浩　訳　http://www.hyuki.com/trans/magi.html

「最後の一枚の葉」　結城　浩　訳　http://www.hyuki.com/trans/magi.html

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AA%E3%83%BC%E3%83%BB%E3%83%98%E3%83%B3%E3%83%AA%E3%83%BC

先駆者としてのヘンリー・ジェイムズ

—新しいことへの挑戦—

田中めぐみ

執筆者データ；
①英語タイトル：Henry James as a Pioneer
②英語名：Megumi Tanaka
③所属：欧米言語文化講座　フランス語圏
④
⑤
⑥
⑦論文を書くにあたっての関心事：ヘンリー・ジェイムズの小説、書法、生い立ち

興味をもった理由；「ねじの回転」（“*The Turn of the Screw*”）を以前に読んだことがあり、ストーリーが気に入ったので、この作者である、ヘンリー・ジェイムズはどんな状況でこの作品を書いたのだろうかと思ったから。また、この作品は約 100 年前に書かれたはずなのに、構成等がすごく読みやすく書かれてあると思ったから。

I．ヘンリー・ジェイムズの生涯

ヘンリー・ジェイムズ (Henry James)は 1843 年にニューヨークで生まれました。ジェイムズ家はアイルランド系の移民の家柄で、アイルランドからの移民であったヘンリーの祖父は、事業に成功し、一代で富を築き上げました。そのため、非常に裕福な家で

育ちました。父は教育上の方針から息子達とともに、何度もヨーロッパへ旅行をして見聞を広めさせています。ヘンリーが生後6ヶ月の時にすでに兄とともに、イギリスやフランスに何ヶ月も旅行しています。またこれだけでなく、少年時代より何度もヨーロッパとニューヨークを行き来していて、生涯全体ではニューヨークにいるよりも、ヨーロッパに滞在している時間のほうが長いとも言われています。それ故幼い頃から、各国の文学に親しむようになりました。

19 歳の時にハーバード大学に進学しましたが一年で中退し、その後ボストンやその近郊のケンブリッジに住むようになりました。1876 年にはロンドンに居住し、死去するまで 40 年近くロンドンを拠点に活動していました。その後も、パリやイタリアへ幾度となく訪問しています。また親交も広め、モーパッサンやフロベール、ゾラ、テニソン、ジョージ・エリオットらを知ります。1905 年には長年離れていた、アメリカへ帰国しましたが、1915 年にアメリカが第一次世界大戦に参戦しないのに業を煮やして、またイギリスへ帰化します。そして、1916 年にメリット勲章を受けます。しかし同年、脳卒中と肺炎を患い死去しました。そしてその亡骸は、祖国であるアメリカのボストン郊外のケンブリッジのジェイムズ一家の墓に葬られました。

II. 発表作品

まず、1865 年に短篇小説「ある年の物語」(“The story of a Year”) を執筆しました。そして、71 年には「後見人と被後見人」(“Watch and Ward”) を発表します。75 年には処女出版である『情熱の巡礼、その他』(*A Passionate Pilgrim*) を出版しました。77 年に『アメリカ人』(*The American*)、78 年には代表作のひとつである『デイジー・ミラー』(*Daisy Miller*) を、79 年には『国際挿話』を発表し、一躍有名小説家となりました。81 年には長篇『ある婦人の肖像』(*The Portrait of a Lady*) を発表し、代表作となりました。89 年頃からは劇作にも打ち込むようになりましたが、失敗におわりました。

98 年に「ねじの回転」(“The Turn of The Screw”) を発表しました。この頃から、心理主義的な作風が多くなり始めます。1901 年に長篇『使者たち』(*The Ambassadors*)、03 年には長篇『鳩の翼』(*The Wings of the Dove*)、04 年に『黄金の盃』(*The Golden Bowl*) をそれぞれ発表しました。後期を代表する長篇小説家となります。05 年には『ニューヨーク版』と呼ばれる、自身の全集『ヘンリー・ジェイムズ全集』(*New York Edition*) の出版にとりかかりました。全集の刊行は 07 年から始まり、没後の 17 年に完結しました。

Ⅲ. 書法

●語り手●

ヘンリー・ジェイムズは初め、自分自身の役割は単なるストーリー・テラーであると考えていたようで、初期の作品2作においては、“My story begins with…” で始まります。全知の語り手が物語を語るという設定です。このことにより「作者＝語り手」の等式は当然視され、語り手は読み手の関心外に置かれ、読み手の関心は語りの内容そのものに向かいます。これは、読書が苦手な人でも読みやすい書法だと言えるでしょう。

●空白●

また、ヘンリーの小説は、読者を困惑させるあいまいな書法を用いていて、物語世界を巨大な空白で満たしています。例えば「ねじの回転」です。[この作品の内容は、両親をなくした幼い兄妹の家庭教師を引き受けた若い女性が屋敷を訪れ、そこで男女の幽霊を目撃します。そして、幽霊たちが兄妹を虜にしていることに気づきますが、兄妹は幽霊の存在自体に気づいていないふりをします。女家庭教師と兄妹との心理的やりとり、屋敷に現れる幽霊と女家庭教師との対決、兄妹がなぜ幽霊に魅かれるのか等を描いた作品です。この作品でのあいまいな書法の結果として、女家庭教師は本当に幽霊を見たのか、あるいは幽霊は出現しておらず女家庭教師の妄想によるものなのかということが最後まで謎のまま終わります。] 語り手の女性の心理のゆれを精緻にえがきだして、この感情のゆれの幅を必然的なものにします。この小説技法は、今となっては当たり前のものですが、ヘンリーが先駆けとなりました。このように、読み手のとり方によって話をとれるというのはとても面白い書法で、この時代にすでにこのような書法を用いたヘンリーはとても新しい人だと思いました。

●展開方法●

他にも気になる手法があります。たとえば、『カサマシマ公爵夫人』(*The Princess Casamassima*) においてです。この主人公はハイアシンス・ロビンソンです。全六部のうちの第一部を成す冒頭の数章からすでに、暗く、悲劇的な色調に塗りこめられています。すなわち、冒頭の三章において主人公はまだ十歳の少年で、その一生に決定的な影響を及ぼすことになるある事実がそこで語られています。しかし一転して、第四章で、成人したあとのハイアシンスが登場するという、映画に似た書法がまず読者を一驚させます。つまり、書き出しの三つの章は、映画で言えばタイトルの出る前に写されのちのち重要な意味を持つことになります。短くて印象的なシーンに相当し、それらの章のさまざまな場面は、のちにフラッシュ・バック的に、作中、幾度か主人公やその幼年期に

かかわりを持つ人物たちの脳裏をよぎることになります。ここにも映画の方法が感じられます。この手法は、まさに映画で現代も用いられています。

Ⅳ. ジェイムズの挑戦、その生き方を見習えば

ヘンリーはアメリカやイギリス、フランスなどたくさんの文化を学び、それらを比べ、作品で描いていきました。このことは、私に日本の文化だけでなく、他国の文化について知ろうという気持ちをおこさせました。また、あいまいな書法という新しい方法を取り入れていくなど、新たなことをどんどん取り入れていくということにも関心を持ちました。私もヘンリーのように新しいことにおびえずにどんどん取り入れ、たくさんの違う文化を学んでいこうと思いました。

⑧学んだこと：大部分の人は全く新しいことの挑戦することを控える傾向にあり、誰かが挑戦してみて広まってから自分もやってみようとします。しかし、ヘンリー・ジェイムズは新しい書法を用いて、作品を書きました。自分がこれだと思ったことは、やるという考え方はすごくいいなぁ、とおもいました。また、自分の生涯で得た考え方、例えば、ヘンリーはアメリカとヨーロッパを行き来していたことによって、アメリカとヨーロッパの考え方、風習を比較しながら、作品を作り上げていきました。そのように、自分が得たものを自分以外の人にも何らかの方法で伝えたいと思いました。

⑨英語の要約：

Henry James was born in America, but he visited Europe for many times when he was a child. As a result, he could compare America and Europe in his novels. The novels of Henry are famous for his ways . He used a narrator, a way to develop a story and so on. His works are still discussed and fascinate many people.

参考文献

『ヘンリー・ジェイムズ小説研究』　甲斐　二六生著　溪水社

『ヘンリー・ジェイムズの語り　一人称の語りを中心に』

市川　美香子著　大阪教育図書

『グレート・ギャツビー』から学ぶ人生の幸福と苦労

畑　美寿穂

① 英語タイトル：*The Great Gatsby*：Happiness and Trouble of Life
② 英語名：Mizuho Hata
③ 所属：欧米言語文化講座　独語圏
④
⑤
⑥
⑦ 論文を書くにあたっての関心事　：　失われた世代・アメリカの繁栄の歴史・世界恐慌・人生の光と影、幸福と苦労・人間の幸福とは何か

Ⅰ．興味をもった理由

以前より世界史の授業やマスメディア等で、フィッツジェラルドの名前を耳にしていたのでこの機会に読んでみたいと思い、取り組むことにした。

フィッツジェラルドの作品をよく引用する村上春樹氏の作品の中でも、特に『ノルウェイの森』では主人公に多大なる影響を与える本として出てきていた。国籍も世代も違うにもかかわらず読む人を夢中にさせる魅力とは何か、また時代を超えても読み継がれるギャツビーの人生から得る教訓は何か、学びたいと思う。

Ⅱ．フランシス・スコット・キー・フィッツジェラルドの生い立ち

フランシス・スコット・キー・フィッツジェラルド（Francis Scott Key Fitzgerald）は1896年9月24日ミネソタ州・セント・ポールに生まれたアメリカの小説家。「失われた世代」を代表する作家の一人である。「失われた世代」とはガートルード・スタインが命名し、1920年から1930年代にかけて活躍したアメリカの小説家や詩人たちを指している。フィッツジェラルドのほかには、アーネスト・ヘミングウェイやシャーウッド・アンダーソン、ワルド・パースなどが含まれている。

フィッツジェラルドが生まれる前に父は破産しており母の実家の援助で暮らしていた。その後父は再就職するもまたもや解雇され、フィッツジェラルドはこの時点で人生の幸福

と苦労の部分に目を向けざるを得ない生活を送っていく。このときから彼は人生について考え出すようになったのではないかと考えられる。その後彼は大学に入るが劇団での作品作りにのめりこみ、授業を休みがちになり、単位が足りなくなる。フィッツジェラルドは大学を中退、第一次世界大戦の影響で陸軍に入隊した。訓練中も書くことをやめず、「ロマンティック・エゴイスト」を書き上げた。出版社に持ち込み、一定の評価は受けたものの出版は認められなかった。第一次世界大戦は1918年に終結し内地勤務のままであったフィッツジェラルドは、ヨーロッパへ渡ることなく除隊した。

除隊する前にキャンプ・シェルダンでゼルダ・セイヤーと出会った彼は除隊後、彼女と婚約するがフィッツジェラルド自身の職業が安定しないため婚約を解消されてしまう。彼はここでも人生の苦労を味わうわけだが、あきらめず、実家に帰って『ロマンティック・エゴイスト』の推敲を重ねる。ついに1920年『楽園のこちら側』として出版された。この作品が評価され、ベストセラー入りするとゼルダと再度婚約、結婚し1921年には娘も誕生した。フィッツジェラルドは苦労の人生から一転し、華々しい栄光を手に入れる。その後『美しく呪われし者』を発表し、1925年には『グレート・ギャツビー』(*The Great Gatsby*)が出版された。この時代こそ間違いなく彼が輝いた時代であり、彼の人生にとっての幸福期だった。

1929年に世界恐慌がおき景気が一気に落ち込みだすと本が売れなくなってくる。また翌年1930年には妻ゼルダが病気になり、彼の人生にも苦労の影が差し始める。そのような状況下でも彼は1934年に『夜はやさし』(*Tender is the Night*)を出版した。しかし売り上げは良くなく、次第に執筆も衰え始め、彼は酒に溺れるようになる。

そのような生活からフィッツジェラルド自身も胸を病み、自殺を図ることもあった。1940年12月21日、フィッツジェラルドは心臓麻痺で亡くなり、その人生を終えた。

常に人生の光と影、幸福と苦労の間を行き来するような人生であった。そんな彼の人生は作品にも影響している。

若き日のスコット・フィッツジェラルド（左）と妻ゼルダ（右）

Ⅲ.『グレート・ギャツビー』とは

フィッツジェラルドの代表作であると同時に、アメリカ文学を代表する作品のひとつでもある。映像化もされており、1920年代の世界恐慌以前の夢のようなアメリカがよく現れ

ている。

ストーリーは、1922 年ロングアイランドを舞台にギャツビーという人物について隣人ニック（Nick）の目から語られている。ギャツビーは謎の人物であり、それが少しずつ解明されていくにつれて、彼の心の清らかさ、純粋さが浮き彫りにされていく。昔の恋を追い求めるが最後は複雑な人間関係から知り合った人間によって殺されてしまう。その彼の死後、ニックは実家に帰る前にギャツビーの家を訪れ、夢や人生について考えながら終わる。

このギャツビーという人物の人生は幸福と苦労に満ち溢れていた。戦地にも行き、頻繁にパーティーを開き、昔の恋人・デイジーのために罪までかぶる。このような幸福と苦労が交錯する人生は作者フィッツジェラルドと重なるところがある。フィッツジェラルド自身戦争に赴くも、アメリカを出ることなく終結した。その中で出会ったゼルダと恋に落ちるのだが、これはデイジーとギャツビーに似ている。ただしこの作品とは違いゼルダとフィッツジェラルドは結婚したが、それが必ずしも人生の幸福になったわけではなかった。つまりこの話は 1920 年代を生きたフィッツジェラルド自身でもあり、同時代を生きた多くのアメリカ人に当てはまりうると考えた。

この話の中では 1929 年には到達していないが、ニックが送る日常生活にも次第に不穏な影がしのびよってきていた。『グレート・ギャツビー』は当時のアメリカ社会の反映であり、作者は好景気の後に必ずおとずれる不景気を予感しながら書いていたのではないだろうか。また主要人物の出身地に東部、西部という言い方が頻出するが、ここには当時の東部と西部の文化の対立という面も組み込まれているようだ。ニックもギャツビーも中西部出身となっているのは、フィッツジェラルド自身も北西部のミネソタ州・セントポール出身だからであろう。

このように『グレート・ギャツビー』には話として楽しめるという点以上に学ぶべきことがたくさん含まれているように感じた。歴史の中でしか見られないアメリカではなく、当時の臨場感あふれるアメリカが登場人物たちを通して描かれている。これによって過去アメリカが好景気のときにどれほど浮かれ、備えを怠ったか、という苦い経験も教えてくれる。この本から人生はどう生きるべきか、指標のようなものを手に入れられたと思う。幸福とは苦労とはなにか今一度考えて生きたいと思うようになった。

一人の人生を追うことで人生の幸福と苦労をわかりやすく表現している。歓喜、落胆、平穏、戸惑いなど生きていくうえで不可欠な人間の感情を取り入れたことで読んでいる人に現実味を与える作品となっている。人間の本質、人生を考える作品だからこそ、世代を超えても読み続けられていくのだろう。

私自身、人生においての困難や憂鬱にぶつかったとき、もう一度読みたいと思うようになった。何度読んでも学ぶところが尽きない作品だと感じる。

繁栄と没落の 1920 年代、という歴史に基づきながらも、その時代を生きた人達の心が繊細に書かれているところが素晴らしいと感じた。アメリカを代表する文学作品であることも納得出来る作品である。

⑧　学んだこと、得たもの：ギャツビーの人生や作者フィッツジェラルドの生き方から、好景気のアメリカで物があふれている状況でも心が幸せでないと満たされないのだ、という人間の心の深さを学んだ。誰でも、どの時代にも、人生には常に幸福と苦労が混在し、それを乗り越えることが大切なのだということも学ぶことが出来た。このような考え方が示されているから、時代が流れても読まれ続けているのだろう。幸福や苦労という光と影が存在しても、どちらも長くは続かないし、そこにとらわれず前に進む、という人生に対する向き合い方を知ることができたし、今の人生を楽しむという力もこの本から得たものである。

⑨　英語サマリー：Both Scott Fitzgerald and Mr. Gatsby had a lot of happiness and troubles in their lives but they were never disappointed.　They always tried to get over them.

This book taught me what the life is and how to face it. Happiness and troubles don't last long.　It's important to know that life has both sides and to enjoy what you are doing now.

参考文献・HP

- 『グレート・ギャツビー』　スコット・フィッツジェラルド著　村上春樹訳　中央公論新社
- 『グレート・ギャツビー』　スコット・フィッツジェラルド著　野崎孝訳　新潮社
- 『アメリカ文学史』　西田　実　著　成美堂
- 映画『華麗なるギャツビー』1926年、1949年、1974年、2001年製作　（原題 The Great Gatsby）
- Wikipedia－スコット・フィッツジェラルド—
- Wikipedia—グレート・ギャツビー—

F・スコット・フィッツジェラルド『偉大なるギャッツビー』の魅力

田中　真裕

①タイトル：Why I Am Fascinated by *The Great Gastby*　②英語名：Masahiro Tanaka　③所属：欧米言語文化講座　英語圏　④　⑤　⑥　⑦論文を書くにあたっての関心事：失われた世代についてフィッツジェラルドが抱いた思い

現代においても多くの翻訳家によって翻訳され、また映画にもなったF・スコット・フィッツジェラルド（F・Scott Fitzgelard,1896–1940）の『偉大なるギャッツビー』（*The Great Gastby*,1925)。その魅力について論じてみる。

興味を持った理由：自分の使っているヘアワックスのギャッツビーがこの作品から来ていることを知り、どんな作品かしりたくなったため。失われた世代においてフィッツジェラルドが偉大なるギャッツビーにこめた思いとその作品の魅力について学びたいため。

Ⅰ.フィッツジェラルドと失われた世代

どんな作品においても言えることだが、作品には作者の思想が反映される。特にF・スコット・フィッツジェラルドは「失われた世代」を代表する作家でありこの作品には様々なフィッツジェラルドの思想が含まれている。

第一次世界大戦においてアメリカでは今まで人々が作り上げてきた思想や文化といったものがすべて崩壊し、そのことによる喪失感が人々を襲った。その中で自らが新しい思想を生み出そうとした世代を「失われた世代」と呼ぶ。

「失われた世代」を代表する作家には以後、傑作と称される作品を生み出したものも多く、フィッツジェラルドの他にもヘミングウェイ(Ernest Miller Hemingway, 1899-1961) やフォークナー(William Cuthbert Faulkner, 1897-1962) などが挙げられる。私は彼らが「失ったもの」はそれぞれ異なり、また新たに生み出そうとしたものも異なるため、それぞれにの作品にこめた思いも異なると思いました。

次にフィッツジェラルドについて。フィッツジェラルドはアメリカ合衆国北西部ミネソタ州のセントポールに生まれた。両親はカトリックを信仰し、共にアイルランド系の家系であり、母は著名な実業家の娘であった。父はフィッツジェラルドの生まれる前に事業で失敗し破産していたが、母の実家からの援助もあり過不足のない生活を送っていた。アメリカ国歌の作詞をおこなったフランシス・スコット・キーは父方の遠縁にあたる。

II.『偉大なるギャッツビー』のあらすじ

舞台はニューヨーク付近の別荘地。謎の男ギャッツビー (Gatsby) は毎晩のように有名人を呼んではパーティーを開いている。物語は彼の家の隣に住むニック (Nick) によって語られる。ギャッツビーが何者で、なぜこのような生活をおくっているか知るものもいない。パーティーの参加者は彼が酒の密売人だの、人殺しだの言っているがどれも根拠がない噂である。やがてニックはギャッツビーとの交流の中で彼が離れていった女性の心を取り戻す為に人生の全てを捧げているのだと知る。そしてギャッツビーはその恋人の男女関係により銃でうたれあっさり死んでしまう。彼の死後、父はニックにギャッツビーの形見である少年時代の本を見せる。その中には毎月３ドル貯金するなど勤勉なギャッツビーの少年時代が描かれていた。

新潮文庫『グレート・ギャツビー』　　映画『華麗なるギャツビー』

Ⅲ.なぜ『偉大なるギャッツビー』が人々の心に響いたのか

まず注目したのはフィッツジェラルドがこの『偉大なるギャッツビー』を書いた時代、つまり第一次世界大戦後はそのまま作品の時代と一致しているということだ。つまりその時の人々の考えや共感するところが多かったということだ。

ギャッツビーの人生に焦点をあると、その生活は華やかであったが最後はあっけなく銃で射殺されてしまう。この華やかさは戦後の好景気を鮮やかに表現しており、ギャッツビーの死の儚さは戦争という時代を暗喩している。

そしてギャッツビーが最愛の彼女をどんな形であれ自分のもとに取り戻そうとしたことが、「失われたもの」を取り戻そうとした当時のアメリカの人々の共感を得たのだろう。

最後にニックはギャッツビーの成功までの苦労を知る。このギャッツビーの貧しさから成功へとつながるサクセスストーリーに私は勇気をもらいました。

Ⅳ.ギャッツビーとニック

作品中に登場するギャッツビーとニックは対照的な人物であるが、この二人は作者のニューヨークに対する思いの象徴である。つまりこの二人は作者の分身である。この街の中で成功を収め都市の繁栄を象徴したようなギャッツビーと、田舎から都市に憧れを持ってやって来て、しかしどこか馴染むことができず、やがては喪失感すら感じてしまうニックは、著者がニューヨークに対して感じる愛と憎しみを表しているのだろう。

Ⅴ.フィッツジェラルドとギャッツビー

フィッツジェラルドの生活もギャッツビーに近いものであり豪華なものであった。ジャズエイジにおいては皆の注目を浴びたが、世界恐慌によって貧しくなった世の中からは避けられた。そのうえ妻は精神を病み、自らは必死に働くも成果が出なかった。そしてフィッツジェラルドは、『ラスト・タイクーン』で再起を図るが、心臓麻痺で四十四歳という若さであっさりと命を落とした。彼はまさにギャッツビーの命運をそのままになぞってしまったのだ。『偉大なるギャッツビー』は輝きの中にあるニューヨークでフィッツジェラルドによって書かれたが、この時点で繁栄には破滅的な予感が含まれていたというのは、なんとも皮肉なことだ。

VI.『偉大なるギャッツビー』の教訓

文学作品はその作品の中に教訓を含むものが多い。その教訓は時代を超えて、地域を問わず人々に響くものである。そこでこの作品を読むにあたってフィッツジェラルドの示した教訓について考えてみた。

一番作者が伝えたかったのは夢をあきらめずに追い続けることの大切さである。ギャッツビーはデイズィの心を取り戻そうと必死に成り上がる。ギャッツビーにとってデイズィはいわば夢であり、その夢に全力になることはすばらしいことである。

このことから、夢を持ちそれに向かい全力で頑張ることのすばらしさを改めて実感できた。今ははっきりとした夢が目の前にはないが、それを自分で見つけ出したい。そして頑張ればいつか夢は現実となり、それは私たちの人生をギャッツビーのように輝かせるのだ。

⑧学んだこと：自ら夢を持ち、それに向かい全力で努力することは大切である。
⑨英語サマリー：It is important for us to have a dream and to do our best for it.

参考文献

・『グレート・ギャッツビー』　スコット・フィッツジェラルド　著
村上春樹　訳　出版：中央公論新社

・『華麗なるギャツビー』　監督　ジャック・クレイトン
製作　デヴィッド・メリック
公開　１９７４年

・ウィキペディア

Ｆ・スコット・フィッツジェラルド

http://ja.wikipedia.org/wiki/F%E3%83%BB%E3%82%B9%E3%82%B3%E3%83%83%E3%83%88%E3%83%BB%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%83%E3%83%84%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%83%A9%E3%83%AB%E3%83%89

グレートギャッツビー

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B0%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%BB%E3%82%AE%E3%83%A3%E3%83%84%E3%83%93%E3%83%BC

ベストセラー小説『風と共に去りぬ』の魅力とは

木下　めぐみ

☆　執筆者データ：①英語タイトル：Attraction of the Bestselling Novel *Gone with the Wind*
②英語名：Megumi Kinoshita　③所属：欧米言語文化講座　英語圏
④　⑤　⑥
⑦論文を書くにあたっての関心事：歴史、南北戦争及び戦後の再建時代、マーガレット・ミッチェル、『風と共に去りぬ』がベストセラー作品となった理由、奴隷制度、近年の女性の社会進出、自立した生き方

Ⅰ．はじめに…

聖書につぐベストセラー小説となった『風と共に去りぬ』(*Gone with the Wind*,1936)は、世界中で大反響をよび、今日も多くの読者に愛され続けている。

私がこの小説と初めて出会ったのは高校二年生のときで、とても第二次世界大戦以前の作品とは思えない、味わい深い作品に感銘を受けた。DVD でも鑑賞してみたが、4 時間弱もの長編であるにも関わらず、少しも長く感じさせない場面展開で、豪華なキャストたちが小説の世界を見事に再現していた。

今回の文学研究では、この歴史に残る大作の作者であるマーガレット・ミッチェル(Margaret Mitchell,1900-1949)が、この一作に込めた思いを探るとともに、世界を魅了したこの作品の魅力を考察してみることにした。

Ⅱ．『風と共に去りぬ』のあらすじ

舞台は、奴隷制が残る 1860 年代のアメリカ南部、ジョージア州アトランタ。南北戦争の頃である。

大農場主の娘スカーレット・オハラ(Scarlett O'Hara)は幼馴染のアシュレー(Ashley)を愛していたが、彼は従妹メラニー(Melanie)と結婚してしまう。彼女は腹いせにメラニーの兄と結婚するが、夫はまもなく戦地で病死。スカーレットは 17 歳にして、彼との間にできた長男ウェードを抱える未亡人となる。

そんな中、南軍は北軍に対して苦戦を強いられ、ついにアトランタも占領される。メラニーを連れ逃げ帰ったスカーレットだが、故郷は荒廃し、頼

りにしていた母も病死していた。飢えを凌ぐことと故郷を守ることだけに集中した彼女は、今度は妹の婚約者を横取りして商売を始めたが、彼もまもなく亡くなってしまう。

やがてスカーレットは、ひそかに彼女に思いを寄せていた海賊的紳士であるレット・バトラー(Rhett Butler)の、強引とも言える求婚に引きずられて結婚する。しかし、彼女はアシュレーへの思いが断ち切れず、次第に二人の気持ちはすれ違い、二人の間に生まれた最愛の娘ボニーの事故死がきっかけで、その最後の絆も断たれてしまう。さらに娘を失ったショックから抜けきらないうちに、スカーレットに最後まで友愛を示し続けたメラニーまでが、流産により命を落とす。そこでスカーレットはアシュレーを奪った恋敵として憎んでいたはずのメラニーを、実は心から愛していたことに気づく。また、自分が愛しているのはアシュレーではなくバトラーだ、ということにもそのとき初めて気づき、一人故郷であるタラの地へ向かうのだった…。

Ⅲ. 内容の分析

この作品はトルストイの『戦争と平和』に影響を受けて書かれており、主人公スカーレット・オハラが最初の恋に破れてから三人の夫を送り迎える数奇な運命に、南北戦争の勃発と北軍の進入、南軍の敗戦、戦争の破壊と戦後の再建といったアメリカで最も重要な歴史的事件を絡めた大作である。

あらすじだけを見ると、一見主人公スカーレットの人物像はわがままで気性の激しい女性のように感じられるかもしれない。しかしこの本を読み終えると、私は彼女に同じ女性として尊敬の念を抱いた。過酷な南北戦争の戦況下、故郷タラの地と家族を守るために、すべてを失ってもなお、生きることを諦めなかった彼女の力強い生き方には、圧倒され、共感せずにはいられなかった。

またこの作品では男女の愛憎など、人間の真実の部分が赤裸々に描かれているほか、南北戦争の残酷さや悲惨さ、黒人は奴隷であるのが当たり前、といった当時の因習などの要素も盛り込まれており、様々な視点から深く考えさせられた。

近年、女性の社会進出が顕著になってきており、戦前に比べるとかなり女性の力が強まってきているが、男性中心社会に生きた当時の人々の中にも、スカーレットのような自立した女性像に、ひそかに憧れる女性が少なからずいたことが、作品の世界的反響からうかがえる。

☆興味をもった理由：なぜこの作品が今もなお世界中で愛され続けているのか/なぜマーガレット・ミッチェルは初作が世界的なベストセラーになったのにも関わらず、生涯この一作しか執筆しなかったのかという疑問。

Ⅳ. 著者マーガレット・ミッチェルの生涯

マーガレット・ミッチェルは1900年11月8日、ジョージア州アトランタで生まれ、幼年期は南北戦争を生き抜いた母方の親類の影響を大きく受けた。

1918 年にワシントン女学院を卒業し、その後医学を志しスミス・カレッジに入学する。しかし1919年1月に母親がその年流行したインフルエンザで亡くなったために、学業を諦めアトランタへ戻った。この出来事は『風と共に去りぬ』でスカーレットの母親が腸チフスで死去し、タラへ戻る場面の元となっている。

その後、彼女はアトランタで日曜版のコラム執筆者となり、1922年にはベリアン・「レッド」アップショーと結婚するが、間もなく離婚する。1925年にはアップショーの友人であったジョン・マーシュと再婚する。

1949年8月11日の晩、ミッチェルは夫マーシュとアトランタのアーツ劇場に行く途中、自動車事故に遭い亡くなった。彼女はアトランタのオークランド墓地に埋葬された。

『風と共に去りぬ』の主人公スカーレットの波瀾万丈な人生のモデルとなったのは、何よりこの作者であるミッチェル自身の人生であると思われる。このような時代を越えて輝く歴史的大作を書くことができたのは、自身の人生経験と母から受け継いだ豊富な知識を兼ね備えたミッチェルならではだと感じた。

Ⅴ.『風と共に去りぬ』出版に至るまで

マーガレット・ミッチェルは、くるぶしの骨折で寝たきり生活を送っていた1926年に、『風と共に去りぬ』を執筆し始めたと伝えられている。当時の夫マーシュの協力もあって、ミッチェルは療養中の楽しみを小説の執筆に見出していた。彼女は最終章から書き出し、章を飛び飛びに書き進めるなど、独特な執筆手法を取っていた。山積みになった原稿はタオルで覆い、戸棚やベッドの下に置いて、他人の目には触れないように保管していた。

1935年、彼女の運命を一変させる出来事があった。南部地域で有望な作家を探していた編集者のハワード・ラザムが、ミッチェルのもとを訪れたのである。彼は膨大な量の彼女の原稿を読み、未完成ではあるが、大ベストセラーになる作品だと確信した。

小説は1936年に完成したが、不思議なことに彼女は最後まで第1章を書かかなかった。同年6月30日、『風と共に去りぬ』は出版され、翌年ピューリッツァー賞を受賞。1939年にはデビッド・0・セルズニックによって映画化され、当時としては画期的な長編カラー映画であったことも手伝って世界的なヒット作となり、アカデミー賞を多数受賞した。

ミッチェルがなぜ第一章を最後まで書かなかったのかは未だ謎であるが、最終章から書

き始めたということは、彼女の中でこの小説を通して伝えたい、何か強いテーマがすでに決まっていたのだと思う。次の章ではそんなミッチェルの心境について、考察してみたい。

VI. ミッチェルがスカーレットに託した思い

マーガレット・ミッチェルが生涯この一作しか執筆しなかった理由は、彼女自身が病弱であり、『風と共に去りぬ』の執筆だけでも膨大な年月を要したため、これ以降創作意欲を喪失してしまったことが大きな原因である、と言われている。しかし私はそれ以上に、ミッチェルが描きたかったのは単なる恋多き女性ではなく、男性が表舞台の時代に自分の意思で強く生きる女性であり、彼女は自身の知識と人生経験の集大成としてこの大作を作り上げたので、もうこれ以上続編を書く必要はないと感じたからだと思う。『風と共に去りぬ』は、そんな彼女の思いがこもった魂の一作なのではないだろうか。

またこの作品でミッチェルは、何度も絶望のふちに立たされながらも、明日への希望を持ち続けた主人公スカーレットを通して、いかなる状況でも最後まで自分を信じて諦めないことの大切さを伝えたかったのだと思う。実際、作者である彼女自身も怒涛の人生を送っており、人間として、女性として、強く生きることがどれほど大変なことか身をもって体験している。若くして母を亡くしたミッチェルが、学業を諦めて故郷に帰るときの心境も、生きるために強い意思をもって、タラの地へ帰郷したスカーレットが物語っている。

そんな彼女の魂の作品『風と共に去りぬ』は、世界中で大反響をよび、時を越えて、歴史の延長線上にある今を生きる私たちにも、大きな影響を与え続けている。きっとこれから先も、世界中の人々の心に響く不朽の名作として、色あせることはないだろう。

この作品の魅力、それはスカーレットの自立した女性としての力強い生き方が、多くの読者に自分を信じ続ける勇気を与えてくれていることだと思う。**私も、これから先何度も人生の壁にぶつかることがあるかもしれないが、そのたびにスカーレットを思い出し、自分の意思を強く持ち続けて、乗り越えていきたいと感じた。**

⑧学んだこと、得たもの：『風と共に去りぬ』という作品は、ミッチェルの人生の集大成ともいえる。いかなる状況でも、最後まで自分を信じて諦めないことが大事であるということを学んだ。
⑨SUMMARY : The novel *Gone with the Wind* is the corpus of Mitchell's life. I learned that it is important to believe in myself and never to give up, however difficult the situation may be.

参考文献・ホームページ

・『風と共に去りぬ①～⑤』Margaret Mitchell 著、大久保康雄・竹内道之助訳、新潮文庫
・『世界文学全集＜第1期第21＞マーガレット・ミッチェル』、河出書房
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%82%AC%E3%83%AC%E3%83%83%E3%83%88%E3%83%BB%E3%83%9F%E3%83%83%E3%83%81%E3%82%A7%E3%83%AB

マーガレット・ミッチェルとスカーレット・オハラ

～『風と共に去りぬ』にみる、二人の女性～

源　麻由

〈執筆者データ〉

①英語タイトル：Margaret Mitchell and Scarlett O'Hara ~Two Women in *Gone with the Wind*~　②英語名：Mayu Minamoto　③所属：欧米言語文化講座 英語圏

④　　⑤　　⑥

⑦キーワード：女性の生き方、南北戦争、19世紀のアメリカ

アメリカ文学界において、小説『風と共に去りぬ』(*Gone with the Wind*,1936)は常に冷遇されてきました。その理由はいくつもあり、ストーリー自体を非難する人もいれば、超ベストセラーになったということのみを非難する人もいます。このレポートでは、小説『風と共に去りぬ』を通して、作者であるマーガレット・ミッチェル(Margaret Mitchell,1900-1949)と小説の主人公であるスカーレット・オハラについて深く追究してみたいと思います。私が実在の人物(ミッチェル)と架空の人物(スカーレット)を同等に扱っているのは、作者の性格がスカーレットに反映されているからで、どうしても切り離して考えることができなかったからです。ミッチェルがスカーレットに託した思いとは何だったのでしょうか。早速、小説『風と共に去りぬ』を手がかりに、二人の女性について見ていきたいと思います。

Ⅰ．作者マーガレット・ミッチェルの生い立ち

ミッチェルは1900年、ジョージア州アトランタで生まれました。彼女の幼年期は南北戦争を生き抜いた母方の親類の影響を大きく受けています。彼女は男の子とばかり遊ぶおてんばで、11、2歳ころまでは、ズボンをはかされていました。あまりにおてんばだったため、暖炉の火がスカートに燃え移ったことがあったのです。

そんな彼女も1918年にワシントン女学院を卒業し、その後医学を志しスミス・カレッジに入学しました。女学院時代、学校との違和感ゆえに、彼女はますます男友達と遊ぶようになりました。このことは、女性仲間からうとまれ、常に若い男たちに取り巻かれていたスカーレットとミッチェルの相似を浮き立たせずにはおきません。しかしながら1919年1月に母親がその年流行したインフルエンザで死去し、ミッチェルは学業をあきらめアトランタへ戻りました。この出来事は『風と共に去りぬ』でスカーレットの母

親が腸チフスで死去し、タラへ戻る場面の元になりました。彼女はアトランタで「アトランタ・ジャーナル」に入社し、日曜版のコラム執筆者となりました。1922年に彼女はベリアン・「レッド」アップショーと結婚しました。しかしながらレッドは酒の密売人であり、彼らは間もなく離婚しました。その後、彼女は1925年7月4日にアップショーの友人であり、終生のよき伴侶となったジョン・マーシュと再婚しました。ミッチェルがスカーレットと酷似した部分があったことはすでに紹介しましたが、再婚後、彼女の性格はがらりと変わって、むしろアシュレーの妻メラニーに似始めました。「事実は小説より奇なり」とはまさにこのようなことを言うのでしょう。

II.『風と共に去りぬ』のあらすじと登場人物

小説『風と共に去りぬ』は、南北戦争下のジョージア州アトランタを背景に、気性の激しい南部の女スカーレット・オハラの半生を、彼女を取り巻く人々ともども壮大に描いた作品です。ここで、簡単なあらすじと、主な登場人物4人について触れておこうと思います。

〈あらすじ〉

アメリカ南部の大農園に生まれたスカーレット・オハラは16歳、輝くばかりの美貌と火のように激しい気性の持ち主だった。スカーレットがひそかに憧れていたアシュレーは、いとこのメラニーと結婚することになってしまった。スカーレットは、腹いせにメラニーの兄チャールズの妻となる。そんなスカーレットをひそかに見つめる謎の男レット・バトラー。そんな中で南北戦争が勃発、スカーレットの波瀾の人生が幕をあけた。

〈登場人物〉

☆スカーレット・オハラ(Scarlett O'Hara)☆

アイルランド人移民の父と優雅なフランス貴族系の家柄出身の母をもつ農園主の娘の若い貴婦人。気が強く、女性でありながら騎士道精神をもつ。一度とらえると離さない動的な美貌の持ち主で、周りの男性からちやほやされて育った。しかし、結婚してすぐに未亡人となり、さらに南北戦争の敗戦後財産を全て失い、波瀾の人生を送ることになる。算数に強く、男性の心を掴む技術に長けており、商才がある。実家の農園を心から愛している。

☆レット・バトラー(Rhett Butler)☆

チャールストンの名家出身だが、紳士的に振舞おうとせず、うわべの愛国心を装うことなく、世間の反感をかう。父親から勘当され社交界からは締め出された。戦争が始まる前から南部の敗戦を予測し、軍隊には加わらず、北軍の封鎖を破って商品を投機的に売り巨万の富を築き、戦後は莫大な公金を横領した海賊的紳士。スカーレットを愛しているが、なかなか本心を見せようとせず、彼独特の方法で求愛を続けた。長い恋路の末スカーレッ

トと結ばれるが、最後には彼女の愛に疲れ、彼女の前から去る。

☆アシュレー・ウィルクス(Ashley Wilkes)☆

スカーレットが思いを寄せる名家出身で教養もあり、紳士的な長身の美青年。スカーレットの誘惑に悩まされるが、精神的な支えとして、最初から従姉妹のメラニーと結ばれていた。「メラニーが僕の全てだった。そしてスカーレットは肉体的にしか愛せない」と、彼女の死後、スカーレットに打ち明ける。

☆メラニー・ウィルクス(Melanie Hamilton Wilkes)☆

旧姓ハミルトン。アシュレーの妻でスカーレットの義妹。病弱だが、心優しく純真で健気な女性。家族を心から愛しており、またスカーレットが自分に深い嫉妬を抱いているとは知らず、スカーレットを信じ、まるで実の姉のように一途に慕っている。普段は気が弱いが、いざ自分の愛するものに危機が迫ると勇気を発揮する。

転んでもただでは起きない強いスカーレット、野生的で男らしいレット・バトラー、繊細な芸術青年アシュレー、そして、優しく母性的なメラニー。この 4 人は、常に読者へ影響を与え続けます。本を読み進める読者の中には、優しいメラニーにこよなくあこがれる一方でとても近づけないと痛感し、そうかといってスカーレットみたいに激しくて強いのはいやだと思う人がいるかもしれません。自分がメラニーなのかスカーレットなのか、つい重ね合わせてしまうところにこの小説の奥深さがあります。それが、この小説の大きな魅力の一つでもあるのです。

Ⅲ.ミッチェルの生き方・スカーレットの生き方

ミッチェルは生涯に 3 度、全く別のタイプの男性と婚約を交わしました。1 人目はクリフォード・W・ヘンリー中尉、2 人目はベリアン・「レッド」アップショー、そして終生の伴侶となったジョン・マーシュです。

ヘンリー中尉はハーヴァード出身、文学の素養もあるおとなしい美男子で、おてんばな彼女にはちょうどよかったのでしょう。この中尉がアシュリーのイメージと重なるといわれています。彼と密かに婚約するものの、2 ヵ月後に彼が戦死してしまいました。この出来事は、結婚してすぐに未亡人となってしまうスカーレットに反映されています。

2 人目のアップショーは、世間の評判がよくないものの、まことに性的魅力に富んだ男でした。彼は、赤毛であることから呼び名がレッドで、密造酒の件、両親からの勘当などの点で、レット・バトラーのモデルといわれています。家族や友人の激しい反対を押し切って、ミッチェルはアップショーと結婚、ところが、彼は生計を立てるどころか、着実な生活すらできず、2、3 ヵ月で結婚生活は破綻してしました。彼女は原因が、ヘンリー中尉への淡いロマンスを告白した自分にあると思い、傷つきながらも自責の念にかられました。

結婚の破綻から立ち直るべく、ミッチェルは「アトランタ・ジャーナル」で新聞記者とし

て働きました。そこで、もともとアップショーの友人だったジョン・マーシュと出会い、再婚しました。この数奇な人間関係は、小説内にも反映されています。『風と共に去りぬ』の三角関係は、アップショー＝ミッチェル＝ヘンリー中尉の三角関係と呼応し、ジョンはその外に立っていました。彼との結婚を彼女がしぶったのは、ジョンがその外に立つ男性だったからであり、従って彼女が結婚後フラッパーから南部女性に変身したのも、自分も関わった三角関係をレット＝スカーレット＝アシュレーの関係にすり替え、物語の次元へと切り離し、みずからをジョンとともにその外へ位置づけたからでしょう。

では、スカーレットにとって恋愛とは、そして結婚とは何なのでしょうか。彼女にとって、結婚とは生きるための手段でしかなかったのです。南北戦争で敗れた南部を生き抜くことばかりを重視しすぎたために、最後の最後まで自分の本当の気持ち(レットへの想い)に気付かなかったスカーレットは、ようやくその気持ちに気付きますが、時機遅く別れを告げられてしまいます。この結末に託された、「失ってはじめて理解するものはある。」というスカーレットからのメッセージは、読者である私たちに対して作者ミッチェルから投げかけられた、永遠のテーマなのではないかと思います。

Ⅳ.スカーレットに託された、理想の女性像

作者ミッチェルの性格が反映された主人公スカーレットは、作者さえもあこがれた理想の女性像として私の目に映ります。スカーレットは私のあこがれの女性です。しかしながら、この小説を読んだ人すべてが、彼女に好感を抱くわけではありません。中には、彼女を「悪女」だと考える人もいます。確かにスカーレットには欠点がありますが、それを補うだけの魅力も持ち合わせています。なので、私には彼女が「悪女」には思えないのです。

スカーレットは、女性が元々生まれ持っている性質や本能に従って、誠実に生きた女性です。投げ出して、逃げてしまえたらどんなに楽かもしれない重荷も全て自分の持つ責任として何としてでも、誰かを傷つけてでも、守り抜こうとする姿勢は、スカーレットがするからこそ、信じられるものがあります。そこには偽善も嘘も存在しないのです。

どこまでも自分の感情や本能の赴くままに激しく生きるスカーレットの姿は、それだけでも、彼女のように生きる事のできない多くの女性をひきつけます。きっと、作者であるミッチェル自身も、スカーレットにひきつけられたことでしょう。しかし、もうひとつの一面、偽善や嘘のない真っ正直に生きる性質こそが一番、このスカーレットの持つ、世間に反感を買われる性質であり、人をひきつける美徳の一部なのだと思います。

私はこの小説において、スカーレットという鏡に映った、マーガレット・ミッチェルという女性が生きた証、彼女の理想を垣間見ることができました。スカーレットのように、絶望の中から希望を見出せる、強い女性になりたいと思います。

マーガレット・ミッチェル　　スカーレット・オハラ

⑧学んだこと：『風と共に去りぬ』の作者マーガレット・ミッチェルと主人公スカーレット・オハラとの比較のなかで、現代社会では目にすることのできない女性の強さを知りました。私にとって両者の生き方はとても真似することのできないものですが、手本として、これから少しずつ自分の道を進んでいこうと思います。

⑨Summary : Margaret Mitchell was an American author, who wrote the novel, *Gone With The Wind* . The novel is one of the most popular books of all time. Scarlett O'Hara is a protagonist, willful and spoiled Southern bell. She would do anything to keep her land and get what she wants. I think that Scarlett is the woman who fulfills her life following the instinct every woman has. This is not only her fascination but also her bad point. I want to be a strong woman like Scarlett who can find hope from adversity.

参考文献

・『風と共に去りぬ～スカーレットの故郷、アメリカ南部をめぐる～』
越智道雄　著、求龍堂、(1999 年)

・『風と共に去りぬ』1～5 巻　大久保康雄　著、新潮社、(1977 年)

ヘミングウェイ『老人と海』に隠されたメッセージ
～私にとってのメカジキとは～

古谷　容子

執筆者データ：
① 英語タイトル：Messages from *The Old Man and the Sea*
② 英語名：Yoko Furuya　③所属：欧米言語文化講座　英語圏
④　　⑤
⑥
⑦論文を書くにあたっての関心事：
現代の私たちは、過程やそれを追い求める自身の熱い思いを大切にせず、結果ばかりにこだわっているのではないだろうか。または、理想ばかりを並べて何も行動に移せていない人が多いのではないだろうか。自分の目標を決め、孤独にも負けず、最後までそれを追い求めた老人サンチャゴの生涯から自分の人生を見つめなおす。

ヘミングウェイ
Hemingway, Ernest
(1899 年～1961 年)

『老人と海』新潮文庫
ヘミングウェイ著、福田恒存訳

興味を持った理由：
ヘミングウェイの代表作である『老人と海』。老人が海に出て、やっと捕まえた獲物を帰る途中に鮫に食べられるというストーリーである。ただそれだけの話にもかかわらず、現在までこれだけ長い間、多くの人に読まれているのはなぜなのだろうか。シンプルなストーリーでありながら、読めば読むほどにいろいろなことを感じさせてくれるこの作品に隠された、主人公である老人サンチャゴからの、また、作者ヘミングウェイから私たち、読者への隠されたメッセージを探りたかったから。

Ⅰ．はじめに

『老人と海』(*The Old Man and the Sea,* 1952)というと、ヘミングウェイの代表作であり、読んだことのある人も多いだろう。ストーリーはタイトルそのままと言ってもよいほど大変シンプルなものである。あらすじは、老人サンチャゴがたった一人で海に出て、不漁が何日も続いた後、大物のメカジキに出会う。捕らえるのにも大変苦労し、帰る途中には鮫に遭遇し、やっと帰り着いたがそのときには、メカジキは鮫に食われて骨だけになっているというものである。読み終えたあとに「それだけ？」や「だから何？」という感想をもつ人もいるかもしれない。しかし、私はそのような感想を持った人にはもう一度作品を読み直してほしい。

この作品は全体を通して老人一人の場面で展開している。それにもかかわらず、私たち、読者が老人と一緒に海に出ているような臨場感を感じさせてくれるのは、ヘミングウェイの情景描写のすばらしさのおかげであろう。また、しばしばでてくる老人の思いや独り言も読者を惹きつける。

Ⅱ．老人サンチャゴについて

時には優しいが、時には過酷でもある海という舞台に一人で、メカジキと出会うまでの長い間、サンチャゴは一体何を思ったのだろう。私はそのことを自分の生活に置き換えて考えてみた。広い海に一人で・・・広い世界に一人で・・・。メカジキと出会うまでの長い間・・・自分が追い求めようとする何かを見つけるまでの長い間・・・。

私はサンチャゴのように何かを追い求めることはできていない。自分が置かれた状況や時代のことなどさまざまなことを言い訳にして現実から逃げている。それに対してサンチャゴは、老いを自覚しながらもどこかでそれを認めない意地をもっている。漁師としてのプライドや男としてのプライドがその意地を支えている。失敗を恐れて何もしないようなつまらないプライドではない。サンチャゴの海に対する姿勢から私たちが忘れかけている目的を持って全力で生きる事の尊さを再認識した。不運だろうと、不幸だろうと必死に闘うことこそ人間がもっとも美しくなれる瞬間なのであると感じた。

また、大きな理想を抱きながらも「老い」という肉体の限界が立ちはだかる。そこにもこの作品のすばらしさを感じる。もしこのストーリーの結末がハッピーエンドであった場合、つまり、苦労の末に大物を港に連れて帰ることができるというようなものであったとしたら、「頑張れば必ず良い結果がついてくる」ということを示す作品になってしまうのではないか。始めにも述べたように、私は結果を重視することではなく、どんな結果であったとしてもそれまでの過程で自分が何を得たかを重視するべきだということをサンチャゴから学んだのだ。

さらに、このカジキ漁は戦争中の混乱した時期に生きることをも描いたのではないかと感じた。戦争をしても何も良い結果は得られない。しかし、戦争を経験することで初めてその無意味さに気づくことができる。そのようなメッセージさえも感じ取ることができた。

サンチャゴの言葉の中に「人間は、殺されるかも知れない。でも、負けちゃいけないんだ！」（The man may be destroyed, but not defeated.）というものがある。ヘミングウェイは他の作品の中で「人は、打ちのめされるが、負ける事は無い」とも言う。つまり、勝ち負けというのは結果ではなく自分の心が決めるものなのだ。希望を捨てたとき、何かを諦めたとき人は負ける。サンチャゴの漁は失敗に終わったと思う人もいるかもしれない。サンチャゴは大きな挫折を経験したのかもしれない。しかし、サンチャゴはメカジキや鮫、さらには孤独や自分自身に勝ったのだ。なぜなら、最後まで諦めなかったから。サンチャゴが得たものは失ったものよりもはるかに大きかったのだ。

私もこれからの人生でこのような大きな挫折を経験することはあるだろう。一度だけでなく何度も何度もあるかもしれない。けれども、何度打ちのめされることがあっても決して自分に負けることがあってはいけない。サンチャゴのように強く生きなくてはいけない。

Ⅲ．ヘミングウェイの描きたかったもの

このサンチャゴの姿はヘミングウェイの理想を描いたものなのではないだろうか。病気や老衰によってヘミングウェイは、文章が書けなくなり、酒に走った。酒を飲んだら、ますます書けなくなり、拳銃を口にくわえて、自殺した。ヘミングウェイは臆病で弱い男だったのかもしれない。だから、サンチャゴのような強い男にあこがれたのだろう。『老人と海』は、ヘミングウェイがあこがれた世界を描いた作品だといえる。また、この作品はヘミングウェイだけでなく私たちみんなもあこ

がれる世界なのではないだろうか。海の上で一人サンチャゴが己の生き方を自分自身に問うたように私たちもサンチャゴの姿をみて自分の生き方を問い直してみてはどうだろうか。

⑧学んだこと、得たもの：
老人サンチャゴに対して生まれた「何のために漁を続けるのか？」という疑問から、自分自身に対する「何のために生きるのか？」という疑問を考えさせられた。老いてもなお希望を失わず、最後までメカジキを追い求める。私にとってのメカジキとは何なのか。漁とは何なのか。私にとっての漁とは人生そのものであることに気づくことができた。まだメカジキは見つけることはできていないが、見つけることができたとき、サンチャゴのように全力で追い求めていくつもりである。

⑨英語サマリー：
I wondered why the old man continued to go fishing. The question made me to think the purpose of my life. His attitude toward the sea impressed me very much. I decided to pursue my goal with all my force through my life.

参考文献

『老人と海』新潮文庫、ヘミングウェイ著、福田恒存訳(2003)

参考ホームページ

人名辞典
http://www.jinmei.info

アーネスト・ヘミングウェイ
信念と勇気のメッセージ

菱川　美保

① 英語タイトル：Ernest　Hemingway：Living up to My Principles
② 英語名：Miho　Hishikawa
③ 所属　：欧米言語文化講座　独語圏
④
⑤
⑥
⑦ 論文を書くにあたっての関心事：
　　1つのことを最後までやり遂げることの難しさ
　　戦争時代を生きた人
　　目の前に立ちはだかる壁を打ち砕く心の強さ

Ⅰ．初めに

ヘミングウェイ（Ernest　Hemingway，1899－1961）といえば、1952年に発表された『老人と海』（*The Old Man and the Sea*）で有名であるが、個人的には1940年に出版された『誰がために鐘は鳴る』（*For Whom the Bell Tolls*）が好きである。ヘミングウェイは英雄的な作品を数多く残したが、作品の多くは出版された当時、非常に注目を集め、賞賛された。これらの作品はいまなお私たち読者に感動を呼び起こす。一体、彼の作品のどのようなところが、現代の私たちの心をも魅了するのだろうか。彼の人生と作品の一部に焦点を当てて探っていきたいと思う。

Ⅱ．ヘミングウェイの生い立ち

まず、彼の足跡をたどってみたい。1899年、ヘミングウェイはアメリカのイリノイ州オーク・パークに生まれた。高校卒業後、『カンザスシティー・スター』紙の見習い記者になったが、第一次世界大戦中に赤十字隊の一員としてイタリア戦線に出た。19歳にも満たなかった彼は砲弾をあび、負傷したため帰国した。その後、パリに渡り、作家ガートルード・スタインらとの出会いをきっかけに本格的に創作の道へと入ることになる。短篇集『われらの時代に』（*In Our Time*，1925）が好評を博し、『日はまた昇る』（*The Sun Also Rises*，1926）や『武

器よさらば』(*A Farewell to Arms*,1929) などで作家としての地位を不動のものとした。この時期の作品では、個人的な体験を基にした無力感や敗北感を主題としており、これが時代の持つ憂鬱や閉塞を見事に表していたために共感を呼び、「ロストジェネレーション」の名が生まれるきっかけとなった。30 年代に入ると社会的な問題に主題が移り、『第５列および最初の４９短編』(1938) に収録された戯曲「第５列」では、政治的、経済的不法行為を強烈に糾弾し、『誰がために鐘は鳴る』では自由の危機を訴えた。以後は創作のペースこそ落とすが論客として様々な場に登場し、スペイン内戦や第二次世界大戦にも従軍記者として参加した。1952 年には『老人と海』を発表してピューリッツァー賞を受賞、1954 年にはノーベル文学賞を受賞した。晩年は健康及び精神状態に支障をきたし、1961 年にアイダホ州ケチャムで猟銃自殺を遂げた。

Ⅲ.『老人と海』 *The Old Man and the Sea*

『老人と海』はヘミングウェイの代表作である。サンチャゴという老漁夫の 3 日 3 晩の孤独な闘いを通して、自然という偉大な存在とそれに対峙する人間の尊厳が描かれている。「俺には運がついていない」と言う、老漁師の舟には一匹の魚の姿も見当たらない。84 日間、不漁が続いていたサンチャゴは、85 日目の朝、遠洋まで漁へ出かける。そこでいまだかつて見たことのない大きなマカジキを仕留める。帰途に着くが、その途中に鮫が苦労して射止めたマカジキを食べ尽くしてしまい、港に着いた時には骨だけになる。家に帰った老人は床に伏し、少年に見守られながら、深い眠りに落ちていく。「老人はライオンの夢を見ていた」という言葉で終わる。

ここで語られているのは、「人間の強さ」なのではないだろうか。自分のやってきたことに誇りを持って、サンチャゴは 3 日 3 晩もかけて一匹の魚と対峙する。この時点で並大抵の人では耐えられる状況ではないことが考えられる。そこでこれまでに見たこともないような大魚を一人で射止めるが、その姿は、勇敢そのものだと思う。自分が今まで築き上げてきた漁師像を全うすべく命をかけ、鮫がマカジキに食いつこうとする時も全力で阻止しようとする。このシーンは緊張感があり、息つく暇もなかった。まさしく自分との闘いであると思う。サンチャゴのように自分の目標に命をかけるくらいの情熱を持って挑んでみたい、そのような感想を抱かせてくれる小説である。

Ⅳ.『誰がために鐘は鳴る』 *For Whom the Bell Tolls*

次に、私が非常に感銘を受けた『誰がために鐘は鳴る』について述べたい。『誰がために鐘は鳴る』は、スペイン戦争に参加したアメリカ人青年ロベルトの物語である。ゲリラ部隊と協力して橋を爆破するまでの 3 日間が描かれている。この作品は作者自らも経験したことをもとに書かれており、戦場の緊張感や心の動き、駆け引きなどが綿密に描かれている。わずか 3 日間の出来事をここまで引き伸ばしているということを考えると、いかに激動の中で多くのことを考

え、経験していたかということを知らされる。それでいて撃ち合いの場面などは読者の緊張も一気に高まり、息つく暇も与えない迫力がある。老人と海で感じたようなマカジキとの闘いの迫力を思わせる一場面であった。

この作品のテーマは、作戦の描写ではなく、義勇兵としてスペイン戦争に参加したアメリカ人の思想にあると思う。また、ストーリーの最大の特徴は戦争という緊迫した状況と対極をなすように、わずかな期間に燃え上がったロベルトとマリアの恋愛が描かれていることだろう。ロベルトは、作戦の決行前に敵軍の布陣の変更を発見した。前線から爆破の中止を司令部に要請するが、動き出してしまった作戦を止めることはできなかった。青年は命令に従い、多くの犠牲を払って橋を爆破する。命令違反をすれば、自分が粛清されるだろう。内部抗争に明け暮れる官僚化した軍上層部。憎しみだけを生む戦闘。もはや意味のなくなった橋の爆破。この戦いにはどんな意味があるのか。なぜ他国までやってきて戦争をしているのか。自分の死は報われるのか。悲惨な戦いの中にあるロベルトはそれでもなお沈着冷静を保ち、使命のためには命をも惜しまない。使命を果たした後、敵の砲撃により、死と直面した時、ロベルトは傷ついた足の痛みの中で、ただ敵が来るのを待っているが、それでも充実感の中にいた。使命を果たし、味方も無事に逃げるめどがついた。愛するマリアも無事に送り出せた。さらには負傷しているが、少しでも敵を食い止めることが出来るかもしれないと。この小説は息づまるほどの感動を呼び起こさせてくれる。強く、果敢で使命に忠実に生き、愛し合うことを学び、後悔することなく死を受け入れたロベルトは誇り高く厳かであった。

V．孤独と闘う勇気と冒険心

以上よりヘミングウェイの作品からは、**孤独や死といった人間の抱える大きなテーマ**を根底に携え、己に課せられた運命に耐え、自分と闘う力強さが読み取れた。

『老人と海』は決してハッピーエンドとは言えないストーリーではあるが、壮絶で果敢な老人の巨大魚との奮闘に、私は胸の高鳴りを抑えることができなかった。誇り高い人格とは、ヘミングウェイの描いたサンチャゴのような人なのかもしれない。困難な状況に陥ってしまったとき、「若い頃はなぁ…」と過去の栄光に縛られ、現実から目を背けてしまう人は多いのではないだろうか。私は、出来るならば、サンチャゴのように、自分を信じ、困難にも全力で立ち向うことのできる人でありたいと思う。

また、『誰がために鐘は鳴る』からも信念を貫く人間の力強さがうかがえた。「ゆえに問うなかれ、誰がために鐘は鳴るやと、そは汝がために鳴るなれば」という 17 世紀の形而上詩人ジョン・ダンの詩句からとられたこの題名は、それだけでもヘミングウェイの人生態度が積極的、行動的であることを示しているように思われる。死を前にした主人公は、「この世界は美しいところであり、そのために戦うに値するものであり、そしておれは……こんなにいい生涯をおくることができた」と独白している。ヘミングウェイ自身、第一次世界大戦時に青年期だった「失われた世代」の一員であったが、この作品からも見受けられ

るように、世界はもはや虚無でもなければ無意味でもなく愚劣でもないと肯定的に捉えていたのではないだろうか。「失われた世代」というのは『日はまた昇る』でヘミングウェイがやや揶揄気味に用いている。命名の由来は彼に創作上の助言を与えていた作家ガートルード・スタインがヘミングウェイ及び当時パリに集まっていた若者に対して投げかけた言葉である。フランスとスペインを舞台に目的を見失った国籍離脱者の群れを描いたこの長篇は、ペシミズムの暗さと不思議な輝きとが交錯する作品である。ここでは彼の作品のほんの一部を紹介したが、他にも多くの名作がある。『武器よさらば』は『誰がために鐘は鳴る』と同じように、愛と運命を交錯させており、いずれも悲劇的な結末に終わるという点では共通している。ヘミングウェイは、私たちをとりまく現実の世界から、膨大に広がる本の中の「海」へと誘ってくれるようだ。彼の作品を読むと冒険心が揺り起こされ、「よし！頑張ろう！」と奮起させてくれる。思い悩んだ時に勇気を与えてくれるこれらの作品は、これから先も多くの人たちによって愛読され続けるのではないだろうか。

⑧ 学んだこと、得たもの：

私はヘミングウェイの作品から、人間として強く生きることの素晴らしさを学んだ。彼は戦争を経験し、自分が生きる世界において「闘う」姿勢を貫くことを肯定した人物であったのではないか。なにか一心不乱に魂を捧げるというなかにこそ、本物の感動、情熱、そして悲哀といったものが詰まっている。それは現代社会においても変わらないのではないか。彼の作品、人生を垣間見ることで、私は何事にも自分の信念のもとに「闘う」ように鼓舞されたのである。

⑨ 英語サマリー：

I got the importance of being brave from the works of Ernest Hemingway. He experienced the war and affirmed that fighting hard is valuable. It is from trying hard that real emotion, passion and sorrow result. I think this is true for all of modern society. I was inspired by his works and life to fight for my beliefs.

参考文献

『老人と海』　新潮文庫　1966　Ernest Hemingway 著　福田恆存　訳
『誰がために鐘は鳴る』（上・下）　新潮文庫　1973　Ernest Hemingway 著　大久保康雄　訳
『武器よさらば』　新潮文庫　1955　Ernest Hemingway 著　大久保康雄　訳
『日はまた昇る』　新潮文庫　2003　Ernest Hemingway 著　高見浩　訳
『ヘミングウェイの源流を求めて』　飛鳥新社　2002　高見浩　著
『ヘミングウェイの時代　短篇小説を読む』　彩流社　1999　日下洋右　著
『ヘミングウェイを追って』　求龍堂　1995　今村楯夫・和田悟　著
『ヘミングウェイと歩くパリ』　新潮社　1994　John Leland 著　高見浩　編・訳
『ヘミングウェイ 愛と女性の世界』　彩流社　1994　日下洋右　著
『ヘミングウェイの女性たち』　国書刊行会　1995　丸田明生　著
『ヘミングウェイはなぜ死んだか』　朝日ソノラマ　柴山哲也　著

参考ホームページ

アーネスト・ヘミングウェイ－Wikipedia
第29回　Key West（1）　http://www5b.biglobe.ne.jp/~aiida/Keywest.html

ＪＡＺＺでみるアメリカの人種背景

木下加奈子

執筆者データ ①英語タイトル：Jazz:The Racial Background of America ②英語：Kanako Kinoshita ③所属：欧米言語文化講座 英語圏 ④
⑤ ⑥ ⑦論文を書くにあたっての関心事：私を含め、多くの人の心を動かしているジャズが人種の壁を越えて全世界に広く親しまれている事。

日本のみならず、世界の多くの人に親しまれているジャズであるが、その発祥はアメリカである。ジャズは音楽のジャンルの中でも一番多様でジャンル分けが難しいとされている音楽である。その理由は人種のるつぼであるアメリカならではの歴史が絡んでいるのである。人々がジャズに何をこめたのか……１００年余りの時代を経て、変化していったＪＡＺＺを通してアメリカの人種背景を見ていこうと思う。

Ｉ．～ＪＡＺＺの誕生～

ジャズは１９世紀後半から２０世紀初頭、アメリカ南部のルイジアナ州ニューオリンズと言う港町で誕生したとされている。

このミシシッピ川の河口にあるニューオリンズという町は、港町という性格上、世界中の民族や文化が集まってくる特異な土地柄であった。１６世紀初頭にはスペイン人によって支配され、のちにフランス領となり、ナポレオンの時代にフランスはこの土地をアメリカに売り渡した。労働力としてアフリカから西インド諸島を経由、またはアフリカから直接の多くの黒人が奴隷として連れてこられた。彼らは過酷な労働を強いられ、故郷のアフリカを思ってドラム缶を叩き、そのリズムに合わせて踊り、歌いながら、耳に入ってくる白人の音楽を自由に奏でた……こうして、自然に黒人の体の中に刻まれたリズム感と西洋音楽のハーモニーが合体して、ジャズの原型となるのである。黒人だけでも様々な歴史や文化背景を背負った人たちが入り乱れているのである。彼らのように故郷から遠く離れてこれだけの事を経験してきた人々の胸の内から溢れる思いは私達の心を掴むものがあるのも納得できる。ジャズ・ソングの歌詞を見ても、彼らの痛切な思いを感じることが出来るし、かなり感情的なものが込められている。これは 1960 年

代以降の人権運動と共に黒人社会からアメリカ全土に広まった、黒人労働歌にも通じる。

黒人たちが取り上げる曲は賛美歌、マーチ、労働歌、ヨーロッパの民謡だったりと、様々であったことからも、彼らは非常に柔軟性があって、何でも自分達のオリジナルにしてしまう事が分かる。彼らの音楽にはいろんな表情があり、とてもおもしろい。

次に、ニューオリンズでジャズが誕生する大きなカギを握っていたのが、クレオール(creole)と呼ばれるフランス系白人と黒人の間に生まれた混血といわれている。西洋音楽と黒人音楽の融合こそがジャズだといわれることからも、このクレオールの存在そのものがジャズへと繋がったと考えてよいであろう。

ニューオリンズ周辺に多くいたクレオールは、当初白人と同等の扱いを受け、音楽教育も含めてヨーロッパスタイルの教育を受けていた。ところが、１８６５年に北軍の勝利で終結する南北戦争後に奴隷制度が解放されたおかげで、クレオールの人たちは白人の扱いを受けなくなったばかりか、それまで優越感を抱いていた黒人からも迫害されるのである。次第に没落していく過程で、クレオールの人たちが黒人社会に入り込んでいくこととなったのである。こうやってアフリカ出身の黒人達が奏でる音楽や歌に、クレオールの人たちが身につけた西洋音楽の要素が自然に溶け込んでいくこととなるのである。

もうひとつ見逃せないのが南軍にいた音楽隊である。南北戦争の終戦を機に音楽隊は次々に解散していき、同時にそれまで使われていた楽器が市場に大量放出されることになる。安価で流通し始めた楽器を手にし、見様見まねで覚えた黒人たちが、やがて独自の音楽を奏でることになっていくのである。

これらから分かるように、JAZZは誰かによって、意図して生み出されたのではなく、歴史的な地域の特性などのいくつかの偶発的条件の下に発祥したものであると考えることができ、そういった意味ではある種特殊な音楽と思われる。

自分の認識でも、クラシックのような精巧なイメージより、少し個に依存しているような独特なリズムを持っている音楽であるので、起源には納得できるものがある。

この頃アメリカで、人種差別を行っている中、黒人がこれまでにすごく文化的な事柄を生み出すには、いろんな障害もあっただろうに、やはりそういったことが起こるにあたっては、いろんな努力や、カリスマ的存在が必要だっただろう。

そこで次にジャズ界に多大な貢献をしたアーティストの１人であるルイ・アームストロングをジャズの歴史と共に紹介する。

Ⅱ. ～Louis Armstrong～

ジャズの最大の功労者といえば、サッチモことルイ・アームストロング(1901－1971)。

１９２０年にジャズの拠点となったシカゴで、彼は第１期黄金時代を築いた。そして、黒人ジャズの活躍と同時に、「**シカゴ・ジャズ**」と呼ばれる白人主体のジャズも登場して人気を博した。

１９３０年中頃、大好況による不況から徐々に景気が回復してくると、人々は明るく軽快な音楽を求めるようになり、ビッグバンドスタイルの「**スイング・ジャズ**」が台頭し、アメリカ国内の大都市に急速に広まり、スイング黄金時代が開花する。第一次世界大戦から大恐慌までのアメリカの隆盛期が「**ジャズ・エイジ**」と呼ばれるのはこのためである。スイング黄金時代が始まるのであるが、当初のブームの立役者は白人バンドが中心であった。スイング・ジャズが人気を博した背景には、人種的障壁で隔てられていた黒人ミュージシャンと白人ミュージシャンの媒介としての役割を果たしたクレオールの存在があったのだ。特に代表的なバンドリーダーの一人であるアームストロングの存在は、ジャズとヴォーカルとの融合という側面(アームストロングはトランペット奏者でありながら自ら歌も歌った)において重要な役割を果たした。

彼のバンドにおいて黒人と白人が少しずつ歩み寄っていくのである。

Ⅲ．～２１世紀のＪＡＺＺの現状～

ニューヨークはジャズの本場だと言われるが、ジャズのそもそもの演り手であった黒人はＲ＆Ｂかヒップホップに流れてしまい、ジャズをやる若手黒人ミュージシャンは、今ではほとんどいない。ジャズ・クラブに行ってみても、多くのバンドは年配の黒人と若い白人(時折日本人)の混合編成である。そして観客は日本とヨーロッパからの観光客。ハーレムの真ん中に位置するアポロ劇場ですらそのような状況なのだ。これがニューヨークのジャズの現状なのである。今日、数少ないジャズ・ミュージシャンたちは食べていくのに苦労している。ＣＤを出したり、一流ジャズ・クラブで演奏できるミュージシ

ャンはほんの一握りである。多くのジャズ・メンは不本意ながらレストランやパーティでＢＧＭとしてのジャズを演奏して生活している。

楽器での多彩なテクニックと、時には胸に響く歌声で魅了したり、熱い想いが込められた歌詞を歌い上げたりと、これだけエモーショナルな音楽は他にない。今一度ジャズに耳を傾けてほしい。他の人種への偏見や世の中の様々なことに対して思う事、時には愛する誰かへ捧げたい気持ちなど、皆にジャズから生きる力をまさに受け取ってほしいのである。

これまでジャズが様々な変化を遂げてきたように、現代では純粋にジャズと呼ばれるものは少ないが、ジャズとポップスが組み合わされたり、クラブ・ジャズといった、もっと聴きやすく耳に入りやすいサウンドで、音楽のジャンルという垣根を飛び越えたところにある音楽ともいえるであろう。

気がつけばジャズは身近なところにあるのである。

⑧学んだこと、得たもの：音楽は人の歴史と共に絶えず変化している。昔ならではの形ではなくとも、人の手によって進化している。それが黒人と白人の距離を埋めたのだから、音楽の力はやはりすごいと思う。

⑨Summery : Music is changed with human history. Although it is not conventional style, it has evolved by human powers. The gap between the Black and the White was been short, so I think the power of music have a great influence to people.

参考文献

『面白いほどよくわかるジャズのすべて』　澤田俊祐　監修　（日本文芸社　2007）

http://www.nybct.com/2-71-jazz.html

http://www.ssmando.com/main/genre/jazzswing.html

キング牧師が教えてくれる生きるヒント

山場友紀子

①英語タイトル：The Hint for Our Lives Given by Martin Luther King
②英語名：Yukiko Yamaba ③所属：欧米言語文化講座　英語圏　④
⑤　　⑥
⑦論文を書くに当たっての関心事：アメリカの移民問題に関心がある。将来、白人が非白人よりも少なくなるという予想があり、マイノリティである人々の動向に注目が集まっている。そんな、変わりゆくアメリカに注目したい。また、どうしてそのような現状になってきたのかということも知りたい。

Ⅰ．はじめに

アメリカは「移民の国」と言われているように、様々な人種、民族の人々が集まっている国である。近年はアジア系やヒスパニック系の移民が増えているが、今回は、奴隷としてアメリカに連れてこられ、奴隷解放宣言後も差別に苦しみ、闘ってきた黒人に焦点を当ててみたい。特にその中でも、黒人に対する人種隔離制度撤廃に取り組み、公民権法成立に尽力し、ノーベル平和賞も受賞したキング牧師を取り上げようと思う。キング牧師が公民権運動に携わった黒人牧師であることは知っているが、実際、彼はどのような人生を歩み、公民権活動へと進んでいったのかは知らなかった。また、黒人に対する人種差別について考える上で欠かせない人物であるから、彼の生き方、考え方を知ることは、それをより深く理解できるのではないかと思う。人種を超えた多くの人をこの運動に駆り立たせた彼の活動、そして、彼の行った運動の中で最も有名なワシントン行進での「私には夢がある」の演説を取り上げ、そこから現代に生きる私たちは何が学べるかを探ってみたい。

Ⅱ．Martin Luther King

ⅰ．キング牧師とは？

１．生い立ち

キング牧師ことマーティン・ルーサー・キング・ジュニア（Martin Luther King Jr.）は１９２９年1月１５日、アメリカジョージア州アトランタで生まれ、１９６８年4月４日に暗殺された。父のマーティン・ルーサー・キング・シニアは教会の牧師を務める町の有力者であり、銀行理事や全米バプティスト会議やモアハウス大学理事も務めていた。したがって、キング牧師は幼

い頃から大金持ちではないが、中産階級の暮らしができた。何不自由のない暮らしができる一方、聖書の一字一句を生活の規則として実践するファンダメンタリスト（根本主義者）の父親が支配する家庭で厳しく育てられた。

2．人種差別の経験

黒人であるキング牧師は、当然のことながら人種差別を早くから経験していた。当時は、中産階級で経済的に余裕があっても、人種差別を受けないで済むような社会ではなかったのである。それほど南部では人種差別が徹底していた。「白人用」などと書かれた看板を見たり、自分にとっては偉い父が白人から差別されるのを見て人種問題の深刻さを認識していった。しかし、両親からは「差別されても白人を愛さなければいけない、それがクリスチャンだの義務だ」と忠告され、それほど黒人を憎んでいる白人をどうして愛することができるのか、と疑問を持つようになった。

3．牧師を志す

キング牧師は、はじめから牧師を志していたのではない。聖書の教えを全て信じることはできず、父親の行っている説教にも疑問を持っており、むしろ牧師にはなりたくなかったようだ。

しかし、大学時代に転機が訪れた。学長のベンジャミン・ノイズの教えや上級生からの影響を受けて牧師になることを決めた。彼が受けた影響とは、教会は、単に聖書の言葉だけを信じて（この世の苦しみは気にせず、来世での幸福を夢見ること）それを伝えるのではなく、信者の抱えている貧困、飢え、偏見などの社会問題について手を貸すことができる、それも信仰の一部であるというものだった。また、これまで憎悪を抱いていた白人と知り合うようになり、白人の中にも多くの見方がいることを知った。「一部の白人の持っている黒人にたいするやさしさをすべて否定してしまうことは、自分自身も、闘う相手である人種差別主義者の白人と同じになってしまうこと」（上坂　ｐ３４）に気付いた。これも、牧師を志すきっかけとなったようである。

4．キング牧師の生まれから感じられたこと

キング牧師も、幼少の頃は他の黒人と同じように人種差別を受け、白人を憎んでいた。しかし、大学に入り、白人の友を持つことで、白人を憎むことは、自分も差別している側と同じなのだという事に気付いた。これを現代の子供達に伝えれば、頻発しているいじめはなくなるのではないかと思った。

← マーティン・ルーサー・キング牧師

ⅱ．キング牧師と公民権運動

１．公民権運動が起きた背景

公民権運動は１９６０年代に盛んに行われたが、実は、黒人は１８６３年の奴隷解放宣言で自由を手にしていたはずである。合衆国憲法修正第１３条には奴隷制禁止、第１４，１５条には「全て国民は合衆国市民」・「法の平等を受ける権利」・「投票権の行使において差別されない」と明記されている。しかし、それから１００年もの間差別が続いたのはなぜか。それは、奴隷制廃止に反対する南部白人たちが連邦政府に抵抗し、人種隔離制度を制定して黒人の権利を制限したからである。黒人の投票権を剥奪する、バスやレストランなどで白人席と黒人席を設ける、黒人と白人が結婚することを禁止するなどの制限を設けた。ここに、「分離すれども平等」の原則が確立し、黒人に対する差別は続いていくことになる。

２．キング牧師の活動

１９５４年、キング牧師はアラバマ州モントゴメリーのデクスター教会に着任した。はじめ、彼の説教は大学の授業のように知識を与えるような内容だった。当時の黒人教会では、目の前の現状（人種差別）には触れずに、来世でどう幸せになるかを説教している場合が多く、よって市民も、差別状態は仕方がないものとして諦めていた。しかし、キング牧師は、人々が、神や世界について自分たちの感情をどう表現したらいいのかを知りたがっていることに気付き、聞いている人を熱狂させることが重要で、自分が理性的な態度を捨て、感情表現を豊かに訴えなければいけないと思うようになった。彼は、理性よりも情緒に訴える、響きの良い言葉を繰り返し用いる演説を行った。

１９５５年、モントゴメリーでバス・ボイコット事件が起きる。これは、交通機関における人種隔離は、社会生活に影響を及ぼすという点で違憲だとして行われたボイコット（乗車拒否）運動である。この運動を行うに当たり、一般の黒人市民の支持を集めるため、影響力のある牧師に協力要請が来た。このとき、同市の教会で牧師をしていたキングにも要請が来た。この出来事が、彼が公民権運動に関わっていくきっかけとなったのである。

こうして、公民権運動に携わっていくキング牧師は、非暴力直接行動という思想を基に活動していく。この、非暴力直接行動とは、ガンジーの思想に影響されていて、「「行動すること」によって、不法な法を破り服従しないという能動的な市民的不服従」（上坂　ｐ６１）を意味する。具体的に言えば、人は不法な法（つまり人種隔離法）には従わない道義的責任があり、ボイコットやデモ行進などをしてそれに従わなかった時に、暴力などで危害を加えられても非暴力で耐えることで、加害者とこれを見ている人々の良心を呼び覚まそうとするものである。

このようにしてキング牧師は、独立宣言や憲法の原則に従って様々な非暴力直接行動を行い、人種差別撤廃を求めていった。この過程で彼は、いかに不当な扱いを受けても白人を恨んだり憎んだりしてはいけないとも訴え運動を進めた。そして、これが功を奏したのか、良識ある白人たちもこの運動に共鳴するようになっていった。

３．キング牧師の活動から感じられたこと

キング牧師は、大学を卒業し牧師となり、黒人たちの為に教会で説教を行った。牧師になった頃から既に、情緒に訴えたり、同じ言葉を繰り返すような説教を行っていた。このような説教のスタイルが、彼の活動の集大成とも言える私には夢があるの演説を生み出したのだと思う。そして、この演説のスタイルは、来世での幸せについて説くような従来の説教をやめてキング牧師自身が生み出したものである。このように、彼は非常に積極的であったので、公民権運動でも頭角を現し、リーダーになれたのだと思う。

iii．ワシントン大行進

１．流れ

キング牧師の非暴力直接行動で一番の盛り上がりを見せたのは、１９６３年８月２８日、奴隷解放宣言からちょうど１００年目の日に行われた「ワシントン大行進」である。この日の参加者は、約２５万人で、うち白人は６万人も参加した。１００人近くの連邦議員も参加するなど、宗教界、労働界、公民権運動団体が大同団結した集会となった。「まさに、この集会は、抜本的な公民権法の成立を願う全米の良心的な人びとを、人種の差をこえて、総結集させる場となった。」（油井　ｐ４０１）そして、集会の最後にワシントンのリンカーン記念堂前で行われたキング牧師の私には夢があるという演説は大変有名なものとなり、公民権法成立を支持する世論は増加していった。その後、根強い抵抗があったものの、１９６４年に公民権法が成立した。

２．「私には夢がある」

まず、演説の前半では、アメリカに対する恨み、つらみ、落胆、半ば脅迫じみた警告を発している。奴隷解放から１００年も経っても、黒人はいまだに差別されているという進歩の無い現状を批判し、差別撤廃の根拠を独立宣言や憲法の精神に求め、それを黒人にも適用するよう要求した。黒人が持つべき様々な権利を小切手にたとえ、その小切手を換金するためにワシントンまでやってきたと述べている。

「しかし、１００年たったいまもなお黒人は自由ではありません。１００年たったいまもなお黒人は、人種隔離の足かせと差別の鉄鎖によってひどく痛めつけられています。１００年たったいなもなお黒人は、物質的繁栄の大海にある貧困の孤島に閉じ込められています。１００年たったいまもなお黒人は、アメリカ社会の片隅でみじめに暮らしており、自分が自分の国の異邦人として扱われていることを思い知らされています。」

「言い換えれば、私たちは、小切手を現金にかえてもらうためにこの国の首都にやってきたのです。…この手形は、白人だけでなく黒人も、すべての人には、生命、自由、そして幸福追求の権利が与えられると約束しています。」

また、黒人同胞に対しては、白人への不信感を取り除き、非暴力の姿勢を説いた。人種隔離撤廃を達成するためには、黒人自身が見返りを求めない神の愛を白人たちに注ぐことを強調している。平等を求める闘いは、白人全体を敵とする戦いではなく、白人をとらえている不正義との闘い、理解と友情を求める闘いであった。

「私は、正義の宮殿の暖かい門口にたつ黒人のみなさんに申し上げなければなりません。私たちは、正当な場所を確保する闘いの過程で誤った行動の罪を犯してはなりません。
反感と憎しみの杯を飲んで自由への渇望を癒そうとしてはいけません。私たちは、いつまでも尊厳と自制の高みに立って闘いを進めなければなりません。新しい世界を生み出す私たちの抵抗が物理的な暴力に墜すことのないようにせねばなりません。」

「黒人社会をまきこんできた信じられないような新しい戦闘精神は、すべての白人に対する不信ににわれわれを導くものであってはなりません。なぜならば、今日この場に多数の白人が参加していることにも示されているように、白人の友人の多くは、自分たちの運命と密接に結ばれており、自分たちの自由は、分かちがたく私たちの自由と結びついていることを理解するようになっているからであります。」

演説の後半は、いよいよ、有名な「わたしには夢がある」の演説に入っていく。ここでは、人を肌の色でなく、能力によって判断することを「私には夢がある」で始まる演説を繰り返し、印象付けることで切実に訴えた。

「私の友人であるみなさんに、私は申し上げたい。私たちは、今日も明日も困難に直面しなければなりません。それでも私には夢があります。それは、アメリカの夢に深く根ざした夢であります。その夢とは、いつかこの国がよみがえって、「人はみな平等に創られているという真理を自明のことと信ずる」信条の真意が現実となる夢であります。」

「私には夢があります。いつの日か、ジョージアの赤土の丘のうえでかつての奴隷の子どもたちと、かつての奴隷主の子どもたちが一緒に腰を下ろして、兄弟として同じテーブルにつく時がくる夢です。」

「私には夢があります。いつの日か、私の四人の子どもたちが、肌の色によってではなく、人となりそのものによって人間的評価がなされる国に生きるときが来る夢です。」

なお、この演説の訳文は古矢旬編『史料で読むアメリカ文化史５　アメリカ的価値観の変容　１９６０年代－２０世紀末』（東京大学出版会）で読むことができる。

3．演説から感じられたこと

キング牧師の「私には夢がある」の訳文を読んで、彼の演説は、その内容や方法が人種や民族を超えて多くの人々の心に響くもので、だから、社会全体を動かすことができたのだと思った。「私には夢がある」で始まる文章を何度も繰り返すことで、演説が、より印象深いものになっている。同じような箇所が前半の「一〇〇年たった今でもなお…」という部分にも見られる。また、「私には夢がある」の部分は、日常見られる差別風景を例に挙げて、誰にでもわかりやすく、人種隔離はいけないことだということを伝えている。

キング牧師は、同じ言葉を繰り返して印象付けたり、例を挙げて分かりやすく解説することで、より多くの人々の心を動かしたが、他にも彼の演説内容に人々の心を動かした理由が感じられた。それは、演説を聞いている人々を「私の友人であるみなさん」と呼んだり、差別してきた白人を「白人の友人」と呼んだ点であるエラー! リンクが正しくありません。。聴衆を「友人」と呼ぶことで、人種隔離の問題や公民権運動が身近なものに感じられ、自分たちの手でこの問題を解決しようという意識が広がっていったのではないかと思う。

このように、キング牧師は、公民権運動の指導者でありながら、民衆と同じ目線に立って誰に対しても分かりやすい言葉で演説を行い人種隔離撤廃を訴え、多くの人々の心を動かしていったのだとわかった。

↑ワシントン行進で演説するキング牧師

Ⅲ．最後に

キング牧師は、キリスト教の教えに即し、また、当時の黒人が差別を克服するのに必要なものとは一体何なのかを自らの人生経験から見つけ出し、非暴力直接行動に結び付けていった。これまで人種隔離制度について受動的で消極的であった黒人の態度を改めさせ、しかしながら、憎んでいた白人には寛容であることをキリスト教の精神に基づき説いた。そして、その活動の集大成がワシントン行進であり、「私には夢がある」の演説であった。

いつの時代も、人と違うことをするのには大変な勇気がいる。特に現代に生きる私達はそれを恐れる傾向があるように思う。しかし、キング牧師のように何事にも恐れず積極的に、かつ誰に対しても思いやりを持って行動することで、目の前にあるどんな大きな困難も乗り越えていけるのだと分かった。

⑧最近、ニュースや新聞などでいじめが話題になっている。いじめを見て見ぬふりをしたり、多数派に居たいからと言っていじめに加担したりすることがあるだろう。そんな時、「いじめはダメだ！」とはっきり口に出せる人がいれば状況は一変するに違いない。キング牧師の生き方から、勇気と思いやりを持って行動することの大切さを学べた。

⑨Recently, bullying is a very timely topic in the news and the newspaper. There are many cases that someone pretends not to look at bullying or others participate in it because they want to be with majority. Then, if someone says clearly “bullying is bad!” it has to change that situation. From King’s life, I can learn it important to act with courage and kindness.

参考文献

有賀貞・大下尚一・志邨晃佑・平野孝編
『世界歴史大系　アメリカ史２－１８７７年～１９９２年』（山川出版社、１９９３年）

上坂昇『キング牧師とマルコムｘ』（講談社現代新書、１９９４年）

猿谷要『キング牧師とその時代』（日本放送出版協会、１９９４年）

明石紀雄・飯野正子『エスニックアメリカ　多民族国家における統合の現実』
（有斐閣選書、１９８７年）

古矢旬編『史料で読むアメリカ文化史５　アメリカ的価値観の変容　１９６０年代－２０世紀末』
（東京大学出版会、２００６年）